

修士学位申請論文

接尾辞「性」の歴史
— 日中両語間の相互影響 —

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程
文化表現論専攻 日本語学専門分野
学籍番号 20B18013

沙広聡

要旨

接尾辞「性」は現在日中両語に共にあり、学術の世界は無論、日常生活でも広く使われる。また、この造語法による語彙の中で、「科学性」「伝染性」「可能性」など、日中同形のものも数多く存在する。

「性」は中国起源の漢字であるものの、その接尾辞的用法が日本語の中で先に発生し後に中国語へ逆輸入されたという流れは、先行研究を通し概観することができる。しかし接尾辞「性」の歴史について、ある特定の時期に着目し議論したものはあるが、日中語彙交流の観点からその歴史全体を考察するものはない。接尾辞「性」が日中両語においてそれぞれどのような経緯を経て発生し普及したか、両語間にどのような関係にあったかなど、不明瞭な点が多い。

したがって、本論文は先行研究を踏まえ、日中語彙交流の観点から接尾辞「性」の歴史全体について考察した。考察の内容について、以下のようにまとめられる。

まず第3章では古典日中両語における「性」の使用について考察した。古典中国語においては、「性」は主に単独で、または2字漢語の一部として使用される。一方、日本語における「性」の使用は古典中国語と共通するところが多いが、独自の意味用法も見られた。

次に第4章では日本語における接尾辞「性」の発生・展開について議論した。第4.1節では、江戸時代の蘭学資料について考察した。「性」による造語は、18世紀中期以前には薬品関係の書物に限ってのみ現れたが、1820年代に入り、医学・物理学・化学などの文脈で数多く確認された。その中に、中国語の語順で作られた2字漢語と「性」との結合も見られた。第4.2節では明治時代の啓蒙書・新聞などの一般出版物を通じ接尾辞「性」の展開について考察した。明治の啓蒙家たちの造語活動によって、接尾辞「性」の使用が自然科学から人文科学へ広まったと言える。

そして第5章では中国語における接尾辞「性」の歴史について考察を行った。第5.1節では17世紀から19世紀後半までの洋学資料・英華字典を調査し、「性」の接尾辞的用法の発生が確認した。第5.2節では19世紀末以降の書籍・新聞を中心に調査し、接尾辞「性」の一般化について検討した。

最後に第6章では第4章と第5章での考察を元に、接尾辞「性」を巡っての日中両語間の相互影響をまとめた。日本語は、古代漢籍を通じて中国語から「性」を受容した。本草学の延長線にある18世紀の蘭方書では「漢字2字+性」の造語が現れた。これらの造語は蘭方書でのみ使用されており、「性」と前部要素の結合関係が比較的弱い。19世紀初頭の蘭学資料には「性」を使用した句が多く見られ、そして1910年代以降「性」による新たな造語が確認された。この期間に17世紀に中国で出版された洋学資料が大量に輸入され、その中に現れた「漢字2字+性」の用例が「性」の1つの用法として当時の蘭学者に受け止められたのかもしれない。一方、中国語側では19世紀末以前の洋学資料・英華字典にも中国語の内発的変化として「性」の接尾辞的用法が現れた。そして1896年以降の中国人の日本留学及び日本人の中国滞在によって、日本語の近代語彙が中国語の中に大量に持ち込まれた。中国語における「性」の接尾辞化は日本語の影響を受けて加速させられたと考えられる。

目次

1.はじめに.....	1
2.予備的考察.....	1
2.1 先行研究.....	1
2.2 問題点.....	2
2.3 調査対象と意味分類.....	3
3.古典日中両語における「性」の使用.....	5
3.1 古典中国語の場合.....	5
3.2 古典日本語の場合.....	8
3.3 まとめ.....	9
4.日本語における接尾辞「性」の歴史.....	10
4.1 蘭学資料における接尾辞「性」の発生.....	10
4.1.1 前期蘭学資料.....	10
4.1.2 後期蘭学資料.....	11
4.2 明治以降の接尾辞「性」の展開.....	15
4.2.1 西周の訳語.....	15
4.2.2 新聞・雑誌における使用.....	17
4.3 まとめ.....	18
5.中国語における接尾辞「性」の歴史.....	19
5.1 洋学資料における接尾辞「性」の発生.....	19
5.1.1 前期洋学資料.....	19
5.1.2 後期洋学資料.....	21
5.2 二十世紀以降の接尾辞「性」の展開.....	22
5.2.1 漢訳和書.....	22
5.2.2 『申報』における使用.....	24
5.3 まとめ.....	25
6.日中両語間の相互影響.....	25
7.おわりに.....	26
参考文献.....	28
謝辞.....	30
年表.....	31
(A) 日本資料における用例.....	31
(B) 中国資料における用例.....	34

1.はじめに

接尾辞「性」は現在日中両語に共にあり、学術の世界は無論、日常生活でも多用される。また、この造語法による語彙の中で、「科学性」「流行性」「可能性」など、日中同形のものが多いと存在する。

従来の研究を通じて、日本語側においては、「性」の接尾辞的用法は 19 世紀前半の蘭学資料にすでに現れ、幕末頃には蘭学資料に限って広く使われていたことがわかる。一方、中国語側においては、「性」の接尾辞的用法は 19 世紀末——日清戦争(1894~1895)後——の新聞紙に見られ始め、日本漢語の流入によって生成したものだと考えられるという。

「性」は中国起源の漢字であるものの、その接尾辞的用法が日本語の中で先に発生し後に中国語へ逆輸入されたというように思われてきた。しかし、接尾辞「性」の歴史について、ある特定の時期に着目し議論したものはあるが、日中語彙交流の観点からその歴史全体を考察するものはない。接尾辞「性」が日中両語においてそれぞれどのような経緯を経て発生し定着したか、また両語間において実際にどのような関係にあったかなど、不明瞭な点が多い。

したがって、本論文は従来の研究を踏まえ、日中語彙交流の観点から接尾辞「性」の発生及び歴史的展開について考察する。

なお、調査するにあたって、「性」に関する用例が 1 字でも 2 字でも 3 字でも、「性」で終わる複合語の前部要素が漢語でも和語でも外来語でも、接尾辞「性」の歴史に関わるものならば、できる限り収集し、その発生と一般化を忠実に再現したい。

2.予備的考察

実際の用例調査及び分析に入る前に、接尾辞「性」の歴史について従来の研究でどこまで解明されたかを把握できるように、まず 2.1 節で先行研究を整理する。次に 2.2 節で先行研究ではまだ解明されておらず、筆者が注目したい問題点について説明する。そして 2.3 節で本論文の調査対象及び意味分類について述べる。

2.1 先行研究

接尾辞「性」の歴史研究は、日本語側からの研究・中国語側からの研究・日中語彙交流の側面からの研究の 3 つに分類できる。順に紹介すると、次の通りである。

日本語における接尾辞「性」の通時的研究は、野村(1981)、朱(2011)、陳(2014)が挙げられる。

野村(1981)は、明治初期から第 2 次世界大戦までの間に刊行された 5 つの英和辞典¹を利用し、「性」を含む 7 つの接辞について、その歴史変化を調査した。「的」「性」「化」に関して、「大正期からもちいられはじめ、現代にちかづくほど多用されている」と評価した。

朱(2011)は、江戸時代の蘭学資料に現れた 3 字漢語を対象にし、各語基の造語力について考察を行った。接尾辞「性」について、その用法は江戸時代中期以降の資料(『窮理通』、1836)に見られ始め、幕末頃には蘭学資料の全範囲へ広まっていたと述べた。

陳(2014)は、接尾辞「性」の歴史的变化には特に触れていないが、明治 5 年の物理教科書『物理階梯』(1872)における接尾辞「性」の大量使用を紹介し、接尾辞「性」の歴史調査に教科書という重要な資料分野を提示した。

¹ それぞれ『改正増補和訳英辞書』(高橋新吉・前田正毅、1869)、『附音図解英和字彙』(柴田昌吉・子

中国語における接尾辞「性」の通時的研究は、沈（1994）が挙げられる。

沈（1994）は、野村（1981）を参考に、3つの英漢辞典²を利用して20世紀前半の接尾辞「性」「化」の辞書登録状況について考察を行った。その結果、1928年の『総合英漢大辞典』に至っても、接尾辞「性」「化」による造語が少なく、「まだ生産的に訳語を構成するパラダイムにおいてしかるべき位置を占めていなかった」と述べた。そしてこれは、英漢辞典の依拠となった当時の英和辞書では、接尾辞「性」「化」による造語法がまだ十分整っていないためだと分析した。

日中語彙交流の視点から考察を行った楊（2017）は、近代の新聞雑誌を利用し、接尾辞「的」「性」「化」の歴史を日中両語でそれぞれ考察し、相互的影響を論じた。「性」に関しては、日本側では明治期の一般出版物³における接尾辞「性」の用例が蘭学資料における用例と比べると少なく、従来の2字漢語の後部要素としての古典用法が多いと述べた。一方中国側での「性」の接尾辞的用法は日本語の影響を受けてできたものであると考え、接尾辞「性」の意味が本来の「～の性質」という意味領域から逸脱していないため、日清戦争以降の留日中国知識人に直ちに受け入れられ、新たな造語活動に用いられたと分析した。

以上の先行研究を元に接尾辞「性」の成立過程をまとめると、次のようになる。

まず日本語側では、接尾辞「性」の用法は、近世——蘭学が隆盛した江戸中期——にすでに蘭学資料に見られ始め、その後蘭学分野の資料の中でのみ使用が広がり、明治時代を迎えた。明治時代における接尾辞「性」の使用は、分野別でかなり違う様相を呈しており、物理学の教科書では、接尾辞「性」が容易に見つかるが、新聞においては、その使用が依然として少ないようであった。大正期以降、接尾辞「性」は英和辞書で多用されるようになり、その後一種の造語法として現在まで続いている。

一方、中国語側では、日本語側の話と比べれば、接尾辞「性」の歴史が浅く経緯も単純なようである。中国語の「性」には本来接尾辞的用法がなかったが、日清戦争後その用法が日本語から伝わってきて、その後さらに英和辞書の影響によって一種の造語法として確立された。

2.2 問題点

論文の冒頭で述べたように、接尾辞「性」について従来の研究はある特定の時期または日中いずれかの言語に限って論じるものが多い。また、日中語彙交流の観点からの考察として楊（2017）が挙げられるが、楊は中国語側の接尾辞「性」が日本語の影響によってできたことを論証するため、中国語側の考察として日清戦争直後の新聞雑誌だけを調査した。

古代の日中両語において「性」がいかに使用されたか、日清戦争以前に日中両語間で行われた漢語交流の中に接尾辞「性」に関するものがあつたかなど、空白や不明瞭なところがまだ多いと言える。

したがって、本論文は先行研究に基づいて2.1節の最後にまとめた接尾辞「性」の成立過程及び日中両語間の関係について参考として取り扱うが、原則的に自分で用例を収集し、

² それぞれ『英華大辞典』（顔惠慶、1908）、『官話』（赫美玲、1916）、『総合英漢大辞典』（上海商務印書館、1928）である。なお、『官話』の著者である赫美玲（Karl Ernst Georg Hemeling、1878～1925）は、ドイツ人であり、1898年から1918年にかけて清及び民国の政府機関に勤めた人物である。

³ 1872年から1877年にかけて刊行された『東京日日新聞』と1887年から1892年にかけて刊行された『反省会雑誌』から一部を抽出し、調査を行なった。

用例に基づいて接尾辞「性」の一貫した歴史を描きたい。なお、接尾辞「性」の歴史を説明するにあたって、以下の3点について特に注目する。

第1は、日本語における接尾辞「性」の発生過程及び要因である。

日本語の視点からみれば、「性」は本来中国語から取り入れられたものであり、日本語内部の変化もあるであろうが、一般的に古典中国語の意味用法に則って使用されると思われる。しかし先行研究によれば、日本語側では江戸時代にすでに「性」の接辞的用法が出現していたのである。日本語における「性」の接尾辞的用法がどのように発生したかという問題について考察を行うため、できる限り多くの蘭学資料を確認する必要があると考えられる。

第2は、江戸時代の蘭学から明治時代の英学への転換の中で、「性」の接尾辞的用法はいかに明治の人々に受け入れられ、さらに発展させられたかという問題である。

陳(2014)が提示した『物理階梯』は、江戸蘭学と明治の自然科学系の教科書を結び付けたが、楊(2017)の調査結果を見ると、江戸蘭学で多用された接尾辞「性」は、明治時代の一般紙などにはほとんど載っていないようである。我々が現在使っている「可能性」や「専門性」などの言葉は、物理分野よりもマスコミを含む人文社会科学分野のほうに由緒があると思われる。筆者は、接尾辞「性」の一般化は明治時代の人文社会系の出版物での使用によって加速されたと推定し、これについて4.2節で詳しく考察したい。

第3は、中国語における接尾辞「性」の詳細な歴史である。

接尾辞「性」の用法は、清末の留日中国知識人によって日本語から中国語に輸入されたと思われる。この認識に基づいて、従来の研究は日中語彙交流が最も活発に行われた日清戦争後の出版物にだけ注目する傾向がある。しかし16世紀あるいは19世紀に中国で出版された数多くの洋学資料についても検討が必要と考える。これは、中国語が接尾辞「性」の成立において日本語からどの程度影響を受けたのか、という問題の解決にもつながるであろう。

なお、接尾辞「性」の歴史を描く際に、その出発点である「性」の意味用法をおさえなければならぬ。第3章で詳しく述べるが、「性」には「人の本性」「性格」「事物の性質」などの複数の意味がある。一方、接尾辞「性」はほかの語の後ろに付いて「そのような性質、状態、傾向、程度であること」などを表す語構成要素として認識されている。接尾辞「性」の意味は、「性質」という「性」の原義との接点が見られる。したがって、次章では古典日本語、中国語における「性」の意味用法を確かめてみる。

2.3 調査対象と意味分類

接尾辞「性」の歴史に関する議論に入る前に、本論文の調査対象及び意味分類について述べる。

本論文は字数と語種にこだわらず、接尾辞「性」の歴史に関わる用例ならば、できる限り収集し考察する。したがって、「性」で終わる複合語だけでなく、「感受スルノ性」「褪色ノ性」のような句レベルのものも研究対象として取り扱う。ただし、仏教用語の「仏性」^{ぶつじょう}「一心性」^{いっしんじょう}「依他起性」^{えたきじょう}などがあるが、ここで議論する近現代接尾辞「性」の成立との関わりが薄いため、対象外にする。

また、「性」で終わる複合語については、前部要素が「性」との関係が様々であるため、分類する必要があると思われる。前部要素に関して、先行研究では主に次のように分類している。

表 1 各先行研究における前部要素の分類

	用語	例
野村 (1978)	体言類、相言類、用言類、 非自立性語基	植物性、 <u>安全性</u> 、 <u>信頼性</u> 、 防音性
荒川 (1986)	体言類、相言類、用言類	植物性/人間性、 <u>安全性</u> 、 <u>信頼性</u>
水野 (1985、1987)	体言類、相言類、用言類、結合類	人間性、重要性、 <u>生産性</u> 、 <u>積極性</u>
吉村 (1987)	セイ : N、AJN、VN、 N ² ショウ : N、VN	科学性/陰性、可能性、創造性/熱性、 <u>積極性</u> 脂性、 <u>心配性</u>
朱 (2011)	名詞性語基(N)、動詞性語基(V)、 形容詞性語基(A)	間歇性、 <u>可展性</u> 、 <u>安全性</u> ⁴
楊 (2017)	名詞性語素(名詞性形態素)など 名詞、形容詞、動詞	理性、 <u>悪性</u> 、 <u>屬性</u> <u>植物性</u> 、 <u>永久性</u> 、 <u>愛国性</u>

先行研究の用語を参考に、本論文では「性」による複合語について以下のように分類する。

表 2 前部要素の品詞性と複合語全体の意味

前部要素	複合語全体の意味	例	類型
名詞性要素 (N)	Nが持つ性質	薬性、病性、物性	N型
	(N以外の)物事が持つ性質	植性(半酸)、石灰性、 社会性	N型(新)
動詞性要素 (V)	～のような性質・能力など	縮性、腐敗性、感受性	V型
形容詞性要素 (A)	～のような性格・性質	急性、悪性	A型
	～であること、～である度合い	急性(新)、悪性(新)、 可能性	A型(新)

「N+性」は、複合語全体の意味の違いから2種類に分けられる。「薬性」は「薬の性(質)」、「物性」は「物の性(質)」であるように、「N+性」は「Nの性(質)」と解釈することができる。一方、「植性」「社会性」などは「Nの性(質)」と解釈しにくく、「性」の実質的な意味が弱まり、意味の重点が前部要素へ移行している。

「A+性」も「N+性」と同じく、2種類に分けることができる。例えば「急性」は古典では「気早いこと」を意味するため、「急な性(格)」と言い換えることができる。一方、

⁴ 朱(2011)には「形容詞性語基+性」に対応する用例がないため、筆者が「安全性」を例として表に入れた。

近世以降の蘭学資料における「急性」は「病気が急に症状を呈して激しく進行すること」を表し、意味の中心が「急」へ移行している。

歴史から見れば、「薬性」や人の性格を表す「急性」などの用法は早く漢籍に見られた。一方、「植性」や病気の進行速度を意味する「急性」などは比較的新しい用法である。したがって、本論文では前者を「N型」「A型」、後者を「N型_(新)」「A型_(新)」と呼ぶことにする。「V+性」については特に分類せず、「V型」と呼ぶことにする。

以上、「性」を後部要素とする複合語について簡単に分類してみた。接尾辞「性」の歴史において、「N型_(新)」「V+性」「A型_(新)」は重要な造語パターンなので、調査・分析する際に特に注目したい。

3. 古典日中両語における「性」の使用

言うまでもなく、漢字は古代中国で発祥した文字である。『大漢和辞典』（大修館書店、1990）や『全訳漢辞海』（三省堂、2011）を引いてみれば、「性」の項目の下に『孟子』『中庸』などの中国の古典に関する記述が一番古く、日本語における漢字「性」の使用は日本人が漢籍を通じて古代中国の文化を学んだことで始まったと思われる。したがって、次節では「性」の源流である古典中国語からその意味用法を確かめる。

3.1 古典中国語の場合

早期の記述としては『漢語大詞典』第7巻（漢語大詞典出版社、1991）があり、例文・例句を省いて意味解釈だけを示すと、次のようになる。日本語訳は筆者が施したのである。

【性】

- ①人的本性。亦泛指天賦，天性。（人の本性。また天賦、天性。）
- ②事物的性質或性能。現常用為名詞性後綴、表示思想感情、生活態度和一定的範疇等。（事物の性質または性能。現在は一般的に名詞性接尾辞として機能し、思想・感情・生活態度・特定範疇などを表す。）
- ③生命；生機。（生命；生氣。）
- ④性情，脾氣。（性情、性格。）
- ⑤身体；體質。（体；體質。）
- ⑥姿態。（姿。）
- ⑦性別。（性別。）
- ⑧指与生殖、性欲有關的。（生殖または性欲に関すること。）
- ⑨仏教語。指事物的本質。（仏教用語。事物の本質を指す。）

『漢語大詞典』の記述によると、「性」には9つの意味がある。その中で⑦の「性別」と⑧の「生殖、性欲」は漢籍を確かめてもその使用例が見当たらないため、比較的新しい意味と考えられる。残った7つの条目のうち、②の「事物的性質或性能」ではその最後に「現在は一般的に名詞性接尾辞として思想・感情・生活態度・特定範疇などを表す。」と説明があり、接尾辞「性」は「物の性質、性能」という意味から派生した用法だと示されている。

次に『四庫全書』⁵などの漢籍を利用し、「性」の実際の使用を見てみる。

筆者が調査したところ、漢籍における「性」は主に単独で、または2字漢語の一部として使用される。出典については、用例の多くは史書・儒学書⁶・医薬書の三つに集中する。次に用例を挙げて「性」の使用実態について述べる。以降、用例の引用に際しては、筆者が句読点の調整を施す。

まず史書について、次のようなものがある。

飲性貪残、遇后無礼、又嘗殺后侍婢。

(趙飲は性格が貪婪暴虐で、皇后の前で礼儀作法がなく、かつて皇后の侍婢を殺したことがある。)

天性抗直、無所回避。

(柳慶は天性が抗直で、(太祖の号令を宣するとき)怯えたことがない。)

(唐令狐德棻『周書』、636(貞観10)年)

且長吏者、民之性命、可不重乎。宜挾其甚者罷之、小者易之。

(長吏たる者は民の命につながっており、問題のある者をやめさせ、能力の低い者を変えるべきである。)

(宋李燾『統資治通鑑長編』、1163~1183年頃)

人物に対する記述が多い史籍では、「性」はほとんど人に関わる「本性」「性格」などの意味で使われる。常用の句型として「性～」が挙げられ、「性」は主語として文頭に来る。1字用法のほか、「性」がほかの漢字と組み合わせさせて2字熟語をなす用法も見られる。「性命」「天性」はこの種の例である。

次に儒学書について考察を行う。

儒学書における「性」は用法の上では史書とあまり変わらないが、周易⁷関係の本では意味的には少し違いがある。用例を示せば次の通りである。

陸績曰：「水在山上、失流通之性、故曰蹇。」

(陸績曰く：水は山上にあり流れる性質を失い、故に滞みと言う。)

(魏王弼・晋韓康伯注等『周易註疏』、265~419年頃)

五行者、木火土金水也、木性仁、火性礼、土性信、金性義、水性智。

(五行とは、木火土金水のことである。木性者は仁、火性者は礼、土性者は信、金性者は義、水性者は智である。)

(北宋劉牧『易数鉤隱図』、960~1127年頃)

5 『四庫全書』(1781)は中国清朝の乾隆帝の勅命によって編纂された中国最大の漢籍叢書の一つであり、先秦から清代前半に至る歴史の主要典籍を三千種以上収録している。

6 儒学とは古代中国、孔子の思想を継承発展させた儒家の学問である。

7 周易とは中国の儒家經典の1つ『易経』に記された占術のことである。周易では8つの自然現象「天・沢・火・雷・風・水・山・地」を元に理論が建てられており、占術を行う人はこうした自然現象の異なる性質を参考に占いを行うという。周易はのちに五行説(火・水・木・金・土)、儒教の五常(仁・義・礼・智・信)などと結び付けられ、より複雑な学問に発展させられた。

周易関係の本では、「性」は「物事の性質」を意味する場合が比較的多い。また、「木性」「火性」など、「性」で終わる2字漢語が多く確認された。「木性」は一般的に「木の性質、木が持っている性質」を表す、つまり「N型」の語であるが、ここでは特別な意味を与えられ、占われる対象の属性を語るときに使う占術用語となっている。

最後に医薬書における「性」の使用について見てみる。

医薬書は薬の記述を中心とする本草書⁸と、実際の治療に関する医方書とに分けることができる。薬の効能に関する文脈では、「性」が頻繁に現れた。用例の一部を示せば次の通りである。

雖曰性平、而服玉者亦多發熱、如寒食散狀。

(陶弘景曰く、玉屑は性平と言われるが、服用者は発熱することが多く、寒食散を服用した後の症状のごとし。)

(南朝陶弘景『本草經集注』、500年頃)

唯肉性大熱、時疾初愈、百日内不可食。

(ただ羊肉は性が大熱であり、季節性の流行病が治って百日以内に食べてはいけない。)

(北宋唐慎微『証類本草』、1100年頃)

蛇床子、性温燥、腎家有火及下部有熱者勿用。

(蛇床子は性が温燥であり、腎臓のところに炎症があり、また下部に熱がある者は使ってはいけない。)

(明繆希雍『神農本草經疏』、1625年頃)

上の3例で示したように、本草書では史書と同じく「性～」のパターンが広く使われる。一方、「性」を後部要素とする2字漢語もしばしば見られる。例を挙げれば、明の医書『普濟方』(朱橚等、1390(洪武23))には「熱性之薬」「寒性之薬」などがあり、清の医書『本草採要綱目』(蔣介繁、1679(康熙18))には「熱性薬品、寒性薬品、温性薬品、平性薬品」がある。前部要素と「性」の関係について、いずれも「V+性」であり、意味的には「(体を)温める性質」「(体を)冷やす性質」などを表す。

医薬書の用例を見渡してみれば、「性」と共起するものはほとんど「熱」「寒」の類に限られる。これは薬物に「五性」、すなわち寒・熱・温・涼・平の5つの性質があるという本草学の理論に起源がある。⁹

なお、以上の3つの分野以外にも「性」の使用があるが、意味用法ともにほぼこの3

⁸ 本草書は本草学に関する書物である。本草学とは中国の薬物学で、薬用とする植物、動物、鉱物につき、その形態、産地、効能などを研究するものである。薬用に用いるのは植物が中心で、本草という名称も「草を本とす」ということに由来するという(『日本国語大辞典』第2版第12巻(小学館、2001)による)。

⁹ 薬物の性質に関する概念は、中国最古の本草書『神農本草經』(著者不詳、25～220年頃)における「四気」(寒・熱・温・涼)の記述に始まり、『本草綱目』(李時珍、1596(万暦23)年)では「五性焉寒熱温涼平」と改めて定義された。本草学について、日本では奈良時代以降、遣唐使によって導入され、江戸時代に最も盛んとなった。日本初の博物・本草書『大和本草』(貝原益軒、1709年(宝永7))にある「性冷」「性熱」などの表現から、薬性に関する理論が当時の日本人に受け継がれていたことがわかる。

つに包摂される。

3.2 古典日本語の場合

「性」の意味について、『日本国語大辞典』第2版第7巻（小学館、2002）では読みが「セイ」の項目と「ショウ」の項目に分けて記述されている。

せい【性】

- (1) 生まれつき。もちまえ。天から与えられた本質。たち。さが。天性。
- (2) ところ。心の作用。心の本体。理性。
- (3) (〔英〕 sex の訳語)
男女、雌雄を比べた場合のそれぞれの特徴、本質。セックス。
(イ) 性別。
(ロ) その対立から起こる本能の働き。また、その行為。性欲。性交。
- (4) (〔英〕 gender の訳)
- (5) (名詞の下に付いて) そのような性質、状態、程度であることを表わす語。
- (6) 「せい(精)(7)」に同じ。

しょう [シャウ]【性】¹⁰

- ① 生まれつきの性質。本性。
- ② 表面を覆われてわからなくなっているが、本来の性質や考え。もともとのもの。
また、正体。
- ③ 物の性質。もちまえ。また、ありのままの性状。
- ④ 習性。ならい。
- ⑤ たましい。こんじょう。精神。性根。
- ⑥ 物の中核になるもの。根本になるもの。
- ⑦ 仏語。本来そなえている性質としての本性・自性など、外からの影響によって変わらない本質。

(1) の「生まれつき。もちまえ。天から与えられた本質。たち。さが。天性。」は、大きく「人の生まれつき」と「物の性質」にまとめることができる。そして、接尾辞用法の条目として(5)の「(名詞の下に付いて) そのような性質、状態、程度であることを表わす語。」¹¹があり、これは原義の(1)から出発したものと考えられる。一方、ショウの項目においては、⑤の「たましい。こんじょう。精神。性根。」と⑥の「物の中核になるもの。根本になるもの。」があり、『漢語大詞典』にない意味解釈を示している。¹²

「性」の使用状況について、『日本国語大辞典』と日本語歴史コーパス(CHJ)を通じてその一端が窺われる。

筆者が確認した限りでは、「性」は1語で、または2字漢語の一部として使われることが多く、古典中国語と共通するところが多い。2字漢語の中には「天性」「火性」「木性」

¹⁰ セイの条目と区別するために番号を本来の()から○に変更した。

¹¹ 言うまでもないが、接尾辞「性」は名詞だけではなく、「生産性」「危険性」「積極性」のように動詞などにも付く。

¹² ⑤と⑥のところで示された「馬もしょうある者なれば、人々のわかれをや惜しみけん」と「武幹と云は柱やしん木(ぎ)のことぞ。物のしょうになることぞ」などの例文を利用して判断した。

など漢籍由来のものが少なくない。

しかし日本語独自の発展も見られた。

「さぞ^{かひしやうな}甲斐性^な無いもの、世話^{せわがひ}甲斐^{なし}なしと思^{おも}うて居^ゐやしやんせうかと、それが^{きどく}気の毒。」
(そんな^{かひしやうな}甲斐性^なのないやつ、世話^{せわ}をする甲斐^{なし}がないと思^{おも}っていらっしやいますでしょうかと、それがお気の毒。)

(初世^{さくらだ}桜田^{じすけ}治助^{けいせい}『傾情^{あずまかみ}吾嬬鑑』、1788(天明8)年)

「甲斐性」のほか、「^{あめしやう}雨性」「^{せわやましやう}苦勞性」「^{せわやましやう}世話焼性」など、随筆・歌舞伎・雑俳などの文学作品では「性」による複合語が複数現れた。いずれも中国語にない造語である。

読みと用例の出典の関係から見ると、セイは勅撰集や漢籍に多いのに対し、ショウは文学作品で多く見られる。遣隋使・遣唐使によって持ち込まれ、のちに正音と推奨された漢音よりも、受容時期が早い呉音のほうが当時の一般人にとって馴染みがあったかもしれない。また、昔の読みはショウであったが、近代以降セイに読み換えられたものもある。

^{にょしやう}女性^なれども、聖人の心^{かよ}に通へり。
(^{にょしやう}女性であるけれど、その心は聖人の心に通じている。)

(吉田^{よしだ}兼好^{けんこう}『徒然^{つれづれ}草^{ぐさ}』、1336(建武3)年)

CHJで「女性」を検索し、原本に振り仮名が振ってある用例の読みを確認したところ、古くはニョショウ、近代以降はニョショウだけでなくジョセイも見られるようになった。なお、「女性」という言葉は漢籍で用例が見当たらないため、日本人独自の造語と考えられる。

3.3 まとめ

以上、辞書・漢籍などを利用して「性」の意味用法を見てきた。ごく限られた資料についての考察なので、あらゆる分野における「性」の使用が上記に示したとおりでとは限らない。しかしながら、『四庫全書』やCHJに収録された各時代の代表的な作品における「性」の使用実態は、古典日中両語における「性」の主な意味用法を反映するものとして取り扱うことができると思われる。

まとめると、古典中国語における「性」は主に1語で、または2字漢語の一部として使用され、意味的には原義の「人の本性」「物の性質」などを表す。「性」で終わる2字漢語の中に、「N型^(新)」「V型」パターン^(新)の用例として「木性」「熱性」があるが、儒学書と医薬書に限られている。

一方、日本では漢籍の輸入によって「性」の使用が始まったが、伝統的な意味用法が受け継がれていたのと同時に、意味・用法上いずれも独自の発展を遂げた。特に「甲斐性」などは従来の「漢字1字+性」と大いに異なり、新たな用法を示した。しかしながら、こうした用例はいずれも「人の性格」を表すものであり、本論文で議論する近現代接尾辞「性」とのつながりが比較的薄いと思われる。

4.日本語における接尾辞「性」の歴史

「性」の接尾辞的用法の発生について、朱（2011）が1798年から1857年の間に出版された7つの蘭学資料を調査したところ、1836（天保7）年の物理書『窮理通』に最初の「漢字2字+性」が確認された。本論文では1798年以前に出版されたものを含め、17世紀から19世紀中期までの蘭学資料について考察を行う。

本章の構成について、まず4.1節では江戸時代の蘭学資料を調査し、接尾辞「性」の発生について考察する。次に4.2節では明治時代の哲学書・新聞などを調査することで、接尾辞「性」がいかに自然科学分野だけでなく人文科学分野でも使用されるようになり、さらに一般化したかについて考察を行う。

4.1 蘭学資料における接尾辞「性」の発生

1639（寛永16）年頃、徳川幕府の鎖国が始まり、中国とオランダだけが日本との貿易を許されるようになった。オランダ側との交流は貿易という経済的な交流から始まったが、オランダ語書籍の輸入によって次第に知的な交流へと進んだ。当時のオランダが「和蘭」または「阿蘭陀」と表記されたため、オランダ語を通じて学ばれた西洋の学問は蘭学と呼ばれた。

蘭学資料について考察するにあたって、本論文では解剖学書の『解体新書』¹³（前野良沢・杉田玄白、1774（安永3））を境に、17世紀から18世紀中期までの書物（前期蘭学資料）と、18世紀後半以降の書物（後期蘭学資料）に分けて述べる。

4.1.1 前期蘭学資料

17世紀から18世紀中期までの蘭学資料は、多くが西洋の薬品に関するものである。これらの書物では「性」が頻繁に使用されており、「熱性」「平性」「燥性」「大熱性」「微温性」「湿温性」など、多くの用例が確認された。

3.1節では古典中国語における「性」の使用について考察したが、蘭学資料に現れたこうした語は、古代中国の医薬書の用語とほぼ共通すると言える。西洋の薬物を記述する蘭学資料でなぜ漢方の用語が使われたのかと疑問に思い調べたところ、「大熱性」が現れた『阿蘭陀外療集』（1746（延享3））という蘭学資料には次の1節があり、当時の背景を示している。

夫人間之五体ニウモルト云血之名四ツアリ、一ツニハサンキ、二ツニハコレラ、三ツニハヘレマ、四ニハマレンコンヤ、右是四色也、サンキ云ハ能血之コトナリ、性ハ熱ニシテ湿也、コレラト云ハ血之上澄薄血也、性ハ熱ニシテ燥也、ヘレマト云ハ血之内ニアル水也、性ハ寒ニメ湿也、マレンコンヤト云ハ血之ヲリ也、性ハ寒ニメ燥也、シカルニ右之血何モ五体ニ無過不及相応スル時ハ無痛也、大過不及有時は諸病モ発瘡腫物モ出来也（後略）

（人間の体にウモルという血の名前に4種類のものがある。1つ目にはサンキ、2つ目にはコレラ、3つ目にはヘレマ、4つ目にはマレンコンヤ。それぞれ異なった色を呈する。サンキというのは血のことで、熱くて湿っている。コレラというのは薄くて澄んだ血で、熱くて乾燥している。ヘレマというのは血の中にある水のようなもので、冷たくて湿っている。マレンコンヤというのは

13 『世界大百科事典』改訂新版第4巻（平凡社、2007）では「日本最初の本格的洋書翻訳書」と評価されている。

血のかすで、冷たくて乾燥している。この4つのものがバランスよく混合していれば体に痛みがないが、バランスが崩れてしまうと諸病も発瘡腫物も出てくるのである。) ¹⁴

(河かわ口ぐちり良りょう庵あん『阿あ蘭らん陀だ外がい療りょう集』卷二、1746(延享3)年)

この1節はいわゆる体液病理学¹⁵の中心的思想を紹介している。上の文によると、人間の体には4つの体液があり、それぞれ「熱湿、熱燥、寒湿、寒燥」の性質を有する。この4つの体液が比率よく混合する場合は人間が健康で、そうでない場合は病気が起こる。「反対のものは反対のものによって対処される」¹⁶という原則に基づき、薬物にもそれぞれ性質を与えられたという。例えば、「寒燥」の黒胆汁の過剰による病気は、熱性の薬品の服用により治ると当時の人が思っていたそうである。

健康に対する認識や薬性に関する記述など、西洋の伝統医学を反映する初期の蘭方医学は従来の漢方医学と共通する部分が多いと思われる。

表3 蘭方医学(初期)¹⁷と漢方医学

	蘭方医学(初期)	漢方医学
理論基礎	四大元素説	陰陽五行説
健康基準	四体液の調和	陰陽の調和
病因	調和の崩れ	
治療法	薬、瀉血など	薬、鍼灸など
薬品の性質	熱・燥・寒・湿	寒・熱・温・涼・平

薬性に関しては、蘭方書では「平」「微温」などの漢方用語が多用されていることから、蘭学者たちは漢方の枠組みの中で西洋の薬物を解釈していたと推測される。しかし用法の面から見れば、漢方では「性+漢字2字」のような句型が広く通用されるのに対し、蘭方書では「漢字2字+性」という造語パターンが作り上げられた。なお、これらの造語は蘭学者たちが薬品の属性を明示するために薬名の下に付け加えたラベルのようなものであり、文章中での使用はあまり見られない。

4.1.2 後期蘭学資料

18世紀中期以降、解剖学を始めとする多岐にわたる専門分野の著書・訳書が新たに世に出された。この時期に出版された書物の中に、「性」による新たな造語・関連表現が見

¹⁴ 杉本(1976)では違う書物(『阿蘭陀外科書』(1696(元禄9))の全く同じ内容を引用し、文に現れた外来語の原語について、「ウモル」はラテン語のumor(液体)、「サンキ」はラテン語のsanguis、「コレラ」はギリシャ語のχοληρα、「ヘレマ」はギリシャ語のφλεγμαが訛った語形、「マレンコンヤ」はギリシャ語のμελαωο χοληの訛語と推測している。参考としてラテン語の原語及び日本語訳を附すと、「ウモル」はhumor(体液)、「サンキ」はsanguis(血液)、「コレラ」はcholera(黄胆汁)、「ヘレマ」はphlegma(粘液)、「マレンコンヤ」はmelancholia(黒胆汁)である。

¹⁵ 体液説は近世初頭まで西洋医学の主導的な考え方であり、日本に伝来した初期の蘭方書にはそうした内容が記されていたことが窺える。19世紀中葉以降、液体病理学は細胞病理学の発達によって完全に否定された。

¹⁶ ヴォルフガング・エッカルト著、今井道夫・石渡隆司監訳(2014)『医学の歴史』(東信堂)を参照。

¹⁷ 同上と梶田昭(2003)『医学の歴史』(講談社学術文庫)を参照してまとめた。

られた。

日本で刊行された最初の西洋内科翻訳書『西説内科撰要』（宇田川玄随、1793（寛政5）～1810（文化7））では、「苛毒ノ性」「腐敗セシムル性」「自ラ変壞スルノ性」「石鹼ニ似タルノ性」「石鹼ノ如キ性」など、「性」を使用した句・文が複数確認された。著者の玄随（1755～1797）は津山藩医の家系に生まれ、漢学に深く通じる人物であった。彼は元々漢方医で「本草学にも関心と研究をかさねていたよう」¹⁸であったが、『解体新書』（1774（安永3））の著者前野良沢（1723～1803）と杉田玄白（1733～1817）の影響で蘭学志向になったという。玄随の『西説内科撰要』では「腐敗」「伝染」「間歇」「清涼」など、漢籍由来の2字漢語が多く見られたが、「性」による新たな造語は確認できなかった。

次に、「性」で終わる複合語を次の表にまとめて提示し、具体的な分析を行う。

表4 蘭学資料における「性」の複合語

	資料名	用例 ¹⁹		
		N型(新)	V型	A型(新)
1814(文化11)	吉田成徳訳 泰西熱病論	石鹼性、石灰性	熱性	悪性
1820(文政3)	宇田川玄真訳 宇田川榕菴校集 和蘭薬鏡	鉄性、瘰癧性	寒性、腐敗性	悪性
1822(文政5)	宇田川玄随訳 藤井方亭増訳 増補重訂内科撰要	垂兒加利性	熱性、清涼性	悪性、善性
1822(文政5)	宇田川玄真 遠西医方名物考	鉄性、酸性、拔爾撒謨性、垂兒加利性、胆液性	熱性、瘰癧性、清涼性、瘰癧性、腐敗性、焮衝性	悪性、良性、固性消石
1827(文政10)	青地林宗 気海観瀾	(なし)	碍性、引性、発燄性、防腐性	(なし)
1837(天保8) -1847(弘化4)	宇田川榕菴 舎密開宗	酸性、磁性、機性、植性半酸、華爾斯性越力、玻瓈性越力、拔塞斯性	和性、蝕性、爆性、和水性、褪色性、延張性、可溶性	中性、苛性、緩性、強性、悪性、剛性

まず「N型(新)」について、比較的早期の用例として「石鹼性」「石灰性」がある。

石鹼性アル物品ハ清涼飲ニ和スル必要ノ品ナリ。

(アルカリ性のある薬品は清涼飲との飲み合わせが必要である。)

¹⁸ 杉本（1977）を参照。

¹⁹ 古典語は基本的に省くが、「悪性」のような新義のある語は新語とみなして表に入れる。また「N型」「A型」に関しては少し用例が存在するが（「病性」「鋭烈性」）、筆者の考察の重点ではないため、省略する。

是レ刺絡ニ因テ壯熱甘解シ、伝染毒ノ力大イニ減衰シ、血液ノ粘膠漸ク融化シ、石灰性ニ変スルコトナシ。成徳案スルニ、しんせき 禮墨藝云、凡ソ石灰ヲ製スルニハ、武火ヲ以テ通紅スルカ故ニ、外面ノ気眼全ク壅塞スト雖モ、裡面ハ許多ノ気眼ヲ生シ、尽ク火氣ヲ含蓄シテ絶テ水氣無シ、是ヲ孕火室ト名付ク。其火氣ハ最モ物ヲ侵蝕スル功アリ、是以テ石灰ノ性ハ極熱ナル者ナリ（中略）今此ニ石灰性ニ変セシムルコト無シト云フ者ハ、壯熱ヲ生セザルヲ云フ。凡ソ焮動熱ノ類ハ其熱スルコト、殆ト石灰ノ火氣ヲ含蓄シテ、其火熱ヲ逞フスルト同一理ナル者ナハレナリ。

（多血症の人は静脈血の一部を体外に除去することによって、高熱がなくなり、伝染毒の毒性が大いに減少し、血液の粘りが徐々に溶け、（病状が進んで）高熱が出ることはない。（中略）今ここで言う石灰性に変わらせないというのは、高熱が出るのを予防することである。）

よしだしげのり たいせいねつびょうろん
（吉田成徳訳『泰西熱病論』、1814（文化11）年）

例文からわかるように、「石鹼性」は「石鹼が持っている性質」ではない。全体で1語となっており、後ろの「物品」を修飾している。現代語では「アルカリ性」と訳す。『西説内科撰要』では同じ意味を「石鹼ニ似タルノ性」「石鹼ノ如クナル性」「石鹼ノ如キ性」という文の形式で表現しているが、『泰西熱病論』では1語にまとめた。²⁰「石灰性」も同様に「石灰が持っている性質」と解釈できず、「今此ニ石灰性ニ変セシムルコト無シト云フ者ハ、壯熱ヲ生セザルヲ云フ」で示した通り、「高熱を伴う病状のこと」という意味である。

「石鹼性」と「石灰性」は意味的にこうした変化が生じただけでなく、用法の面においても従来の「木性」などの「漢字1字+性」という制限を打破し、新しい用法を示したと言える。

「V+性」に関しては、以下3種類に分けて述べる。

1つ目は漢籍に出典のある2字漢語である。この種の語は形式上は蘭学者にそのまま受け継がれたが、意味的には変化が生じた。例えば「熱性」は漢籍では「体を温める薬性」という意味であるが、蘭学資料では「壯実熱性多血ノ諸病」というように、病気の修飾語として使用されることが多く、「高熱を伴うこと」を表す。

2つ目は前部要素の出典が漢籍にある3字漢語である。先ほど述べたように、玄隨の『西説内科撰要』で使われた「腐敗」「清涼」などは漢籍由来の漢語である。こうした2字漢語のちに玄隨の養子宇田川玄真（1769～1834）に受け継がれ、彼が著した『和蘭薬鏡』（1820（文政3））と『遠西医方名物考』（1822（文政5））では「腐敗性」「清涼性」などの複合語が現れた。

そして興味深いのは、3つ目の用例である。この種の用例は2つ目と同じく「漢字2字+性」となっているが、前部要素が漢籍に出典がなく蘭学者による造語である。次の「防

20 『泰西熱病論』の凡例には「訳有対訳、有意識。何謂対訳。影彼土之文而直訳之是也。故多顛錯之累。何謂意識。唯主其意、弗必其文、剩者削之、不足者補之、以訳之是也。（中略）刊削冗長、定取句義（中略）是余之所以主意識也」（翻訳には対訳と意識という2種類がある。対訳とは何か。外国の文に従ってそのまま訳すことである。故に語順を転倒するところが多い。意識とは何か。ただ意味を重視し原文にこだわらず、余ったところを削り、不足のところを補うことである（中略）冗長を削除し、文を定めるのである（中略）従って私は意識を第一義とする。）とあり、著者の吉田成徳が意識を重視し、文の簡潔明瞭を求めることが窺われる。

一方、『西説内科撰要』の凡例では「通編之訳、只以達原文之意為急、以求其所未発、知其所不同為主。故語勢多曲從拗合、捨此就彼者不覺言転語倒（後略）」（本書は原文の意味を理解することを急務とし、未発を求めて不同を知ることが主とする。故に語勢に紆余曲折が多く、文に日本語の文法と合わないものもある）と書いてあり、翻訳の重点が意味の理解に置いてあり、表現上冗長または不自然なところがあると表明されている。これらの違いは「性」の使用にも影響を与えたかもしれない。

腐性」はその1例である。

硬気^ニ有^レ防^レ腐^性、木炭亦然、是以炭末^ニ貯^レ肉^ヲ、勝^ニ於^レ塩蔵^ニ。

(炭酸ガスには防腐性がある。木炭もまた然り。よって石炭がらに肉を貯蔵し、その効果は塩蔵に勝る。)

あお ちりんそう き かいかんらん
(青地林宗訳『気海観瀾』、1827(文政10)年)

『気海観瀾』は日本初の物理書である。漢文体で書かれたこの本では読者の理解のために訓点が付いている。ここの「防腐性」は訓点の示す通り、「腐るのを防ぐ性」という意味である。「防腐」は「述語+目的語」という構造の2字漢語である。²¹

「防腐」の出典を確かめたところ、漢籍には見当たらなかった。しかし、杉田立卿が訳し林宗が校正した『黴瘡新書』(1821(文政4))には「防腐水」があり、『遠西医方名物考』には「防腐」がある。したがって、この語は蘭学者が漢語の語順で作った和製漢語と考えられる。そして林宗が「防腐」の後ろに「性」を付け加えて「防腐性」を造出したのである。

『気海観瀾』が出版された10年後、日本初の近代化学書『舎密開宗』が世に出された。漢文訓読体で書かれたこの本の中で、同じ訓点付きの用例が見られた。

按^ニ皿内留物中、亜爾箇兒ニ可^レ溶^性ノ塩類ヲ溶ス工夫ナリ滌後再ヒ秤量シテ其塩、亜爾箇兒ニ溶タル分量ヲ知ル。

(思うに皿に残った物質の中にアルコールに溶ける(性質のある)塩類がある。アルコールでこれを溶かし、皿を洗った後に再び重量を量ることによって、アルコールに溶けた塩類の分量を知ることができる。)

(宇田川榕菴『舎密開宗』、1837(天保8)～1847(弘化4)年)

返り点に従って読めば「可溶性」は「(アルコールに)溶かす可き性」という文になる。現在では「可溶性」は1語として定着しているが、造出された当初は一般の読者にとって全く馴染みのない表現なので、訓点を用いて理解しやすいようにしていたのだろうと思われる。『舎密開宗』にはほかに「不可溶拔塞斯塩」「可溶炭酸土類」などがあり、榕菴は「可溶」を造出した上に、さらに「可溶性」を作ったと考えられる。

「防腐性」も「可溶性」もその前部要素の結合関係から見れば、いずれも日本語と異なる、漢語の語順で作られた和製漢語である。これらの造語は、始め意味理解の上では漢文の知らない一般人に訓読されていたであろうが、直読されることによって次第に1語として確立し、その後日本語の中に定着したのではないかと考えられる。

「A型^(新)」については、「漢字1字+性」の用例がほとんどである。この種の造語は修飾語として機能することが多く、「固性消石」のように物質名の前に来てある種の性質を提示する。

²¹ 2字漢語は内部の結合関係を元にさらに分類することができる。朱(2015)の用語を使えば、「防腐」(腐るのを防ぐ)は述客関係、「腐敗」(腐ってくずれる)は連用修飾関係、「瘰癧」(ひきつる)は並列関係である。

4.2 明治以降の接尾辞「性」の展開

前節で考察した蘭学資料が医学・物理学・化学などの書物であるため、接尾辞「性」の使用は自然科学の文脈に限られる。しかし我々が現在使っている「可能性」「方向性」などの言葉は、自然科学よりも人文社会科学で発生したのではないかと思われる。次に『西周全集』（大久保利謙編、1960～1981）及び新聞・雑誌を利用し、明治以降の接尾辞「性」の展開について考察する。

4.2.1 西周の訳語

明治時代に入り、西洋近代の思想・制度などが日本の啓蒙家たちによって導入されるようになった。西周（1829～1897）がその中の1人として、西洋哲学の翻訳・紹介などに努めていた。「性」に関する訳語として次のようなものがある。

然ルニ、此視聽ハ感覺ナリ、而シテ其知ル者ハ、固有ノ理性ニシテ、觀念ノ由テ生スル者ナリト（後略）英レーズン、佛レーズン、日フェルニユンホウト、蘭レーズン、爰理性ト訳ス、道理ヲ知ルノ性ナリ
（英語レーズン、フランス語レーズン、ドイツ語フェルニユンホウト、オランダ語レーズン、ここにおいて「理性」と訳す。道理を知る能力である。）

（西周『生性發蘊』、1873（明治6）年）

『生性發蘊』は西がイギリス人 George Henry Lewes の *Comte's philosophy of the sciences*（1853（嘉永6））を参考にして著した哲学書である。注釈に「英レーズン（中略）爰理性ト訳ス」と書いてあるように、「理性」は *reason* の対訳語である。漢籍にも「理性」という漢語があるが、現代語とは異なり意味は「本性」に近い。西は古典語の「理性」に「道理ヲ知ルノ性」という新しい意味を付与し、それを英語の *reason* の訳語に使ったと思われる。意味から見れば、「性」は「能力」と解釈することができる。似た用例として「靈魂一元論」²²（1870（明治3）頃）には「覚性」「感性」「作性」があり、それぞれ *perceptibility*、*sensibility*、*action* の訳語である。

「漢字2字+性」の用例として次の「自愛性」「他情性」が挙げられる。

夫生体ノ情ハ別テ二トナス、第一ニ自立ノ情、第二ニ為群ノ情トナリ、動物ノ下等ナル者ニ於テハ唯第一ノ者ヲ現ハシ、第二ノ者ハ雌雄ノ別備リテヨリ初テ現ハレ、動物ノ上下相連ナル階級上ニ於テ其階級ノ上ル度ニ從テ漸次ニ強クナリ（中略）今、之ヲ名ケテ自愛性 他愛性ト称ス²³（この生活の感情的側面は個性と社会性からなっている。（中略）今この2つを「自愛性」「他愛性」と名付ける。）

（西周『生性發蘊』、1873（明治6）年）

²² 断片的なメモ帳の一部で、「靈魂一元論」（1870（明治3）年頃稿）の草稿本である。定稿本の「靈魂一元論」について大久保が「草稿本の丹念な推敲から推すと苦心の作で、量こそ少ないが主著の一つに数えられよう」と評価した。実験心理学に関する西独自の哲学的思索で、後の『生性發蘊』『生性割記』などとも内容的に関連がある。

²³ *Comte's philosophy of the sciences*（1853）によると、「ウイーアツヘキチウ」は *vie affective*、「ペルソナリツチ」は *personality*、「ソシアゼリツチ」は *sociality*、「エゴワズム」は *egoism*、「アルトルイズム」は *altruism* である。

例文で示したように、西は最初に「自立ノ情」と「為群ノ情」という句を使っていたが、最後にこれらをそれぞれ「自愛性」と「他愛性」という語に書き換えたのである。

一方、全く同じ意味の内容であるが、漢文体で書かれた『原法提綱』²⁴では「自愛之性」という句で表現されている。

曰凡肉体之生類莫不有自愛之性、苟有自愛之性斯有同感之性、此二者生類之等愈高則其度愈強、且大若人此性尤強大而以兼有理性之靈、明能記往而察来（後略）

（曰く、生物は自愛の能力がある。自愛の能力があれば、同感の能力も必ずある。生物の階級が高ければ高いほど、この2つの能力も高くなる。人間の場合は、この2つの能力が非常に高く、兼ねて道理を知る能力を持つ。）

（西周『原法提綱』、1877（明治10）年前後）

『原法提綱』では「理性」などの2字漢語を除き、全て「～之性」となっている。これもまた漢文という文体上の字数制限と関係があると考えられる。すでに述べたように、漢文における文字の結合は主に2字である。そのため、2字漢語が「性」の前に来る場合、一般的に助詞の「之」（「の」）がついてくる。『原法提綱』における「性」の使用は漢籍のそれと一致していると言える。

『原法提綱』にはほかに「特殊之性」「確定之性」「道德之性」があるが、1890年代の『哲学雑誌』や『女学雑誌』などを見れば、いずれも助詞が脱落し、「特殊性」「確定性」「道德性」となっている。これと同じく、『美妙学説』（1877（明治10）前後）に「感受ノ性」「感受スルノ性」とあるが、『哲学字彙』（井上哲次郎、1881（明治14））ではそれを「感受性」に変えた。

興味深いことは、西の著書には自ら作った哲学用語だけではなく、江戸蘭学の造語もたくさん登場した。『生性発蘊』における「性」の用例を見ると、物理・化学の専門用語は半分以上を占めており、純粋な哲学用語よりも多いことがわかる。これは同書で解説されたカントの実証哲学が、実証による自然科学の論説に基づいたものが多かったからである。次はその1例である。

バイオロジー、希臘ビオス、生ロゴス論ノ義、是坤度ノ創立ニ係ハリ、尋常此語ヲ用フル意ニ非ス、即チ動植ノ生機ヲ具フル者ノ学ニシテ、無機性ヨリ別ツナリ、其中ニ有機性化学ヨリ解剖生理諸学ヲ兼ヌ。

（バイオロジー、カントによって創立されたものである。バイオロジーは生物に関する学問で、無機物とは異なるのである。その中に有機化学があり、解剖・生理諸学を兼ねる。）

（西周『生性発蘊』、1873（明治6）年）

『生性発蘊』では、「機性無機性ノ異種」「無機性ノ諸物」「機性ノ諸物」のように、「無機性」の反対語として「機性」が多く使われている。この語は現代日中両語にともにある「有機」「無機」の源と考えられる。

²⁴ 起稿年代に関して、大久保（1962）では1877（明治10）年前後と推測する。「法は天に出ざるもの」という儒教思想に基づき、法と道德・経済との関係、権利と義務の関係などを議論する法律関係の書物である。

「機性」に関しては、宇田川榕菴の著書である『植学啓原』（1833（天保4）年）ですでに「機性体」などが用いられており、のちに『舎密開宗』でも使われた。

以上のことから、西周の作品における接尾辞「性」の使用は、江戸時代の蘭学と深く関わりがあることがわかる。明治時代の人文科学系の書籍に現れた接尾辞「性」の用例の中には、蘭学から直接に継承されたものもあれば、蘭学の造語法を用いて新たに作られたものもある。

4.2.2 新聞・雑誌における使用

幕末明治期の資料として、『幕末明治新聞全集』²⁵（世界文庫、1961～1966）がある。

1863（文久3）年の『日本貿易新聞』から1872（明治5）年の『新聞雑誌』までの記事を確認したところ、「性」は伝統的な意味用法で使われていたことがわかった。

『官板海外新聞』文久2年9月の記事に「悪性」、『万国新聞紙』慶応3年12月下旬の記事に「慢性諸病」という「A型^{（新）}」の用例があるが、それ以外は「天性」「性質」「資性」などいずれも古い2字漢語である。したがって、幕末明治初期の一般紙における「性」の使用は、ほとんど古典語の段階にとどまっていると言える。

1873（明治6）年に日本最初の近代的啓蒙学術団体である明六社が結成された。翌年に発行された機関紙『明六雑誌』では早くも「性」の接尾辞的用法が現れた。

如此キ題号ヲ掲ケハ、其主論ノ如何タルヲ論セス人々其心裏^{カリラシチ}貪知的ノ性ヲ攪動シテ見ムト欲シ、聞カムト欲シ、其秘密タル如何ヲ知ラムト欲シ、其意思ヲ發揮スルコト猶痛痒ノ撫搔ヲ要スルカ如シ。（中略）故ニ秘密ノ二字ハ却テ強ク人ノ貪知性ヲ揮擢シ、一層其注意ヲ倍セシムル者ナリ。

（このような標題を掲げれば、見る人の好奇心はくすぐられる。（中略）ゆえに「秘密」という2文字は強く人の好奇心を刺激し、人の注意を倍ぐらい引くのである。）

（西周「秘密説」『明六雑誌』第十九号、1874（明治6）年）

凡物ノ親和スル固有ノ合同性アレバナリ、其区別スル固有ノ分異性アレバナリ。合同性ヨリ吸引カヲ生シ相会集シ凝テ一物ヲ為ス。是レ同ノ功用トス。既ニ一物ヲ成セバ、分異ノ性抗抵カヲ生シ物々相磨励シ別レテ其能ヲ呈ス。

（万物には、同じものが寄り合う固有の合同性もあれば、ほかのものと区別する固有の分異性もある。合同性から吸引力が生じ、ものが凝集して一物をなす。これは同の効果である。すでに一物をなしているが、分異性から抵抗力が生じ、ものともものが摩擦し分かれる。）

（阪谷素「尊異説」、同上）

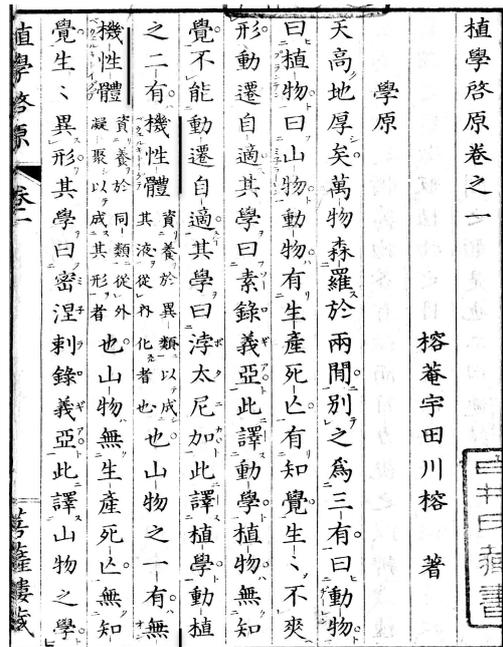


図1 宇田川榕菴『植学啓原』

²⁵ 幕末明治期に日本に刊行された新聞を網羅的に収録した新聞集である。

『西周全集』における使用状況と同じく、明治初期の接尾辞「性」は前部要素との結びつきはまだ弱いと思われる。しかしながら、「性」の接尾辞的用法は1種の造語法として明治の啓蒙家たちに用いられ、彼らの文章を通じて一般人へ紹介されていったと考えられる。

CHJ に収録された日本最初の総合雑誌『太陽』（博文館、1895（明治28）～1928（昭和3））の1901年のデータを検索したところ、接尾辞「性」による造語はすでに50種以上存在し、接尾辞「性」は日本語の中で同時すでにかなり普及していたことがわかる。

4.3 まとめ

以上、日本語における接尾辞「性」の発生及び展開について見てきた。考察の結果については、次のようにまとめられる。

まず18世紀中期以前の蘭方書では薬性を表す「漢字2字+性」の造語が作り上げられた。これは従来の本草学における「漢字1字+性」「性+漢字2字」から発展したものと考えられ、前部要素が「熱・寒・湿・燥」などの漢方用語に限られている。

18世紀中期以降、蘭学が盛んになるにつれて、「性」は薬物の記述にだけではなく、物質・病気などの記述にも頻繁に使われるようになった。「性」の用例に関して、最初は文・句レベルの表現が多かったが、その後徐々に簡略化され、語彙レベルの用例が現れた。そして1820年代から「性」は複合語の後部要素として頻繁に使われるようになり、その後1種の造語法として蘭学者の間で普及した。

江戸時代の蘭学から明治時代の英学への転換が進む中、接尾辞「性」の使用が自然科学から人文科学へ及んだことが観察された。自然科学における接尾辞「性」は「物事の性質」という原義から派生した用法だと言うのなら、人文科学における接尾辞「性」は「物事の性質」と「人の本性」という2つの原義から出発したものとも言えるのではないかと思われる。

「性」による複合語の前部要素には、漢籍からの借用語と蘭学者が自ら作った和製漢語とがある。後者の中に「防腐」「可溶」など中国語の語順で作られたものもある。これらの漢語に訓点が振ってあることから、当時の日本人はおそらく訓読して意味を理解していたと思われる。しかし意味の理解として訓読するものの、中国語の語順を変えずそのまま音読することによって「～性」が1語として初めて成立したと考えられる。

ここで1つ注目すべき点がある。漢語は元来単音節語で、1音節でも1語を表すことができ、文字の結合があるがせいぜい2字までである。²⁶調べた限り、漢籍における「性」の使用はまさにこの規則のとおりである。しかしながら、蘭学者による造語はこのような字数制限を打破しており、「性」と結合する前部要素は漢字1字だけではなく、2字以上の語やカタカナもある。この現象の理由については、西洋近代の科学知識を導入するに当たって、従来の「漢字1字+性」だけでは事足りず、「性」を様々な語に付け加えて複合語を構成させ、新しい概念や事物を1語に表現する需要が大きかったためだと考えられる。

なお、日本の蘭学が始まる前に、中国では西洋人の宣教師が渡来し、新しい知識を中国に持ち込んだ。宣教師たちと中国人が著した洋学書がのちに日本に舶載され、蘭学者に読まれたわけである。中国の洋学資料における「性」の使用はどうなっているか、蘭学資料と比べてどのような相違あるいはつながりがあるか、これらの問題は第5章で中国語における「性」の歴史を明らかにした上で検討する。

²⁶ 陳（2001）と朱（2011）を参照。

5. 中国語における接尾辞「性」の歴史

第3章ですでに述べたように、古典中国語において「性」は基本的に1字（1語）または2字漢語の後部要素として機能することが多い。「性」の接辞的用法はいつどうやって発生したかという問題について、先行研究はいずれもそれが日清戦争（1894～1895）後日本語の大量流入が契機となったと主張している。

現代中国語における多くの言葉が、1895年以降日本に渡った中国知識人によって日本語から持ち込まれたことは紛れない事実である。「性」の接尾辞的用法に関しても、この流れに乗じて発展したと考えられる。しかし、それ以前の中国語における「性」の使用はどうなっているか、従来の研究ではあまり検討されていない。

表5で示しているとおり、近代中国における新語の発生は主に次の3つの時期と関連する。

表5 中国における歴史事件とそれに対応する調査書物

時 期	歴 史	調 査 書 物
1583年～1720年前後	カトリック宣教師の中国進出	漢訳洋書など
1807年～19世紀末	プロテスタント宣教師の中国進出、アヘン戦争など	漢訳洋書、辞書など
1894年～20世紀初頭	日清戦争、日本人の中国滞在、中国人の日本留学	新聞、雑誌など

次節からこの3つの時期に遡って「性」の使用実態を見てみる。

5.1 洋学資料における接尾辞「性」の発生

本節では17世紀また19世紀に中国で出版された漢訳洋書・辞書などについて考察する。便宜上、カトリック宣教師たちによる書物を前期洋学資料、プロテスタント宣教師たちによる書物を後期洋学資料と呼ぶことにする。

5.1.1 前期洋学資料

明末清初期にマテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552～1610、中国名利瑪竇) を代表とするカトリック宣教師たちが中国に渡来し、布教を推し進めるために宗教に関わるものを含む西洋の学問書を翻訳し、中国人に紹介した。そのため、この時期に宣教師たちによる翻訳書（漢訳洋書）が多く出版された。そしてこれと同時に、西洋の知識を学んだ中国人学者も独自に科学書を書き始めた。

調査の限りでは、これらの洋学書における「性」の使用はほぼ漢籍と同じく、1語で、または2字漢語の一部として使われている。例を挙げれば、次のようである。

然而海水不氷，亦具有熱性矣。

（海水は氷結せず、物を温める性質があるのである。）

曰海水之咸、本從熱乾而生、由燼灰而出、即自具有熱乾之性、亦且挾有燼灰之體。
 (曰く、海水の塩辛さは本来乾燥によって生じ、燼灰によって出る。すなわち海水自体は物を乾燥させる性質がある。)

(熊三抜口述・徐光啓筆記『泰西水法』²⁷、1612 (万歴 40) 年)

「性」が伝統的な用法で使用される中、1 つ例外があった。

中通曰、水流下而趨中、有剛火性也、火炎上而旋昇、有柔水性也。

(中通曰く、水は流下して中へおもむき、剛火のような性質がある。火は炎上して上へ昇り、柔水のような性質がある。)

(方以智『物理小識』、1664 (康熙 3) 年)

方以智 (1611~1671) は明末清初期の啓蒙家・哲学者で、カトリック宣教師による西洋学問の紹介の最盛期に活躍した人物である。彼はドイツ人宣教師アダム・シャール (Johann Adam Schall von Bell, 1592~1666、中国名湯若望) らから西洋近代の学問を学び、ヨーロッパ諸学を含む多岐にわたる知識を『物理小識』という百科全書式の書物にまとめた。

例文で示したように、この本には「剛火性」「柔水性」という従来の用法と異なる「漢字 2 字 + 性」の用例が現れた。

語の構造から見れば、この 2 例はいずれも「N + 性」のパターンである。蘭学資料に現れた「N + 性」の用例と対照してみれば、蘭学資料では「石灰」「石鹼」「硝子」など純粋な名詞が用いられるのに対し、「剛火」と「柔水」はさらに「A + N」に分解することができ、臨時的な組み合わせとも言える。また、前部要素の「剛火」「柔水」と後部要素の「性」との意味関係から見れば、両者は修飾と被修飾の関係にあり、意味の中心が「性」にあると思われる。したがって、ここでの「性」は現代語の接尾辞「性」とはまだ距離があると言える。

しかし語形の面から見れば、「剛火性」と「柔水性」は従来の「漢字 1 字 + 性」の用法と明らかに異っており、1 つ大きな発展を示している。

『物理小識』のちにほかの洋学書とともに徳川吉宗の改革によって日本に舶載され、蘭学者たちの間で盛んに読まれた。『唐船持渡書籍目録』によれば、1805 (文化 2) 年には長崎から『物理小識』は 353 冊も輸入されたそうである。²⁸

『物理小識』はのちにほかの洋学書とともに徳川吉宗の改革によって日本に舶載され、蘭学者たちの間で盛んに読まれた。『唐船持渡書籍目録』によれば、1805 (文化 2) 年には長崎から『物理小識』は 353 冊も輸入されたそうである。²⁸

日本語側で 1810 年代以降の蘭学資料に現れた「性」の接尾辞的用法は、この『物理小

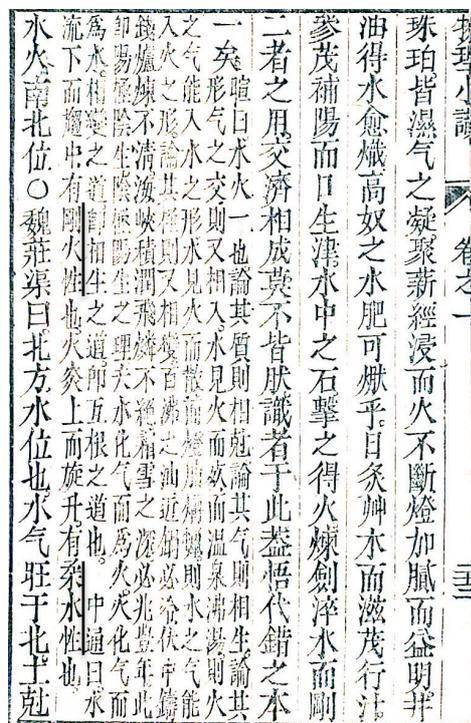


図 2 方以智『物理小識』

²⁷ 『泰西水法』はイタリア人宣教師サバティノ・デ・ウルシス (Sabatino de Ursis, 1575~1620、中国名熊三抜) と中国人学者徐光啓 (1562~1633) が共著したヨーロッパの水利学の書物である。

²⁸ 王敏 (2009) を参照。

識』のわずかの2例の影響によって発生したものと断言できないが、「性」の1つの用法として当時の蘭学者たちに受け止められたのではないかと考えられる。

徳川吉宗の洋書解禁（1720年（享保5）頃）とほぼ同時に、中国では清の康熙帝より布教禁止の命令が下され、西洋学問の流入が途切れた。

5.1.2 後期洋学資料

19世紀初頭、厳しい禁教政策の下でロバート・モリソン（Robert Morrison、1782～1834、中国名馬礼遜）を代表とするプロテスタント宣教師たちが中国に到来し、布教と同時に翻訳活動を開始した。この時期には翻訳書だけではなく、英語中国語の対訳辞書（英華字典）も宣教師たちによって数多く編纂された。さらに1860年以降清朝政府の命令により専門的な翻訳局が設けられ、より多くの洋学書が編まれるようになった。

モリソンの『英華字典』（1822（道光2））からドーリットル（Justus Doolittle、1824～1880、中国名盧公明）の『英華萃林韻府』（1872（同治11））までの50年間の辞書を見てみると、「性」に関する用例は、ほとんど1字または2字漢語となっており、意味的には人間の性格を表すものが多い。例えば、「急性」は *hot blood or temper* や *hasty disposition* の訳語であり、「悪性」は *an evil disposition* や *of a bad nature* の訳語である。いずれも人間の性格を表す「A型」の用例である。

唯一の例外として右図の用例がある。

ドイツ人宣教師ロブシャイト（Wilhelm Lobscheid、1822～1893、中国名羅存徳）が編纂した『英華字典』

Causticity, the quality of acting like fire on animal matter, 燒肉性 shíu yuk, sing'. Sháu juh sing, 灼肉性 chéuk yuk, sing'. Choh juh sing; cut-

図3 羅存徳『英華字典』

（1866～1869（同治5～8））では、*Causticity* に当たる訳語が「燒肉性」「灼肉性」であり、現代語では普通「腐食性」「腐蝕性」と訳す。

羅存徳の字典ではほかに「相膠之性」（現代語では「粘着性」、以降現代語訳を付す）、「歸極之性」（極性）などの表現が多く見られ、以上の2語はこのような句から発展してきたものではないかと思われる。

プロテスタント宣教師による洋学書にも新しい変化が見られた。

アメリカ人宣教師マッゴウアン（Daniel Jerome Macgowan、1814～1893、中国名瑪高温）と中国人学者華蘅芳による鉱物学書『金石識別』には、次の用例が現れた。

除磁石之外、亦有別種金石。微有撰鉄性。（中略）白金等砵、亦有些微撰鉄性。又有本不撰鉄、及燒熱之、便成撰鉄者、因其中有養氣鉄、經熱則靈故也。

（磁石以外にまた別の金石があり、やや磁性を持つ。

（中略）白金などの鉱石も少し磁性を持つ。また本来磁性を持たず、温められて鉄を引きつけるようになるものもある（後略）

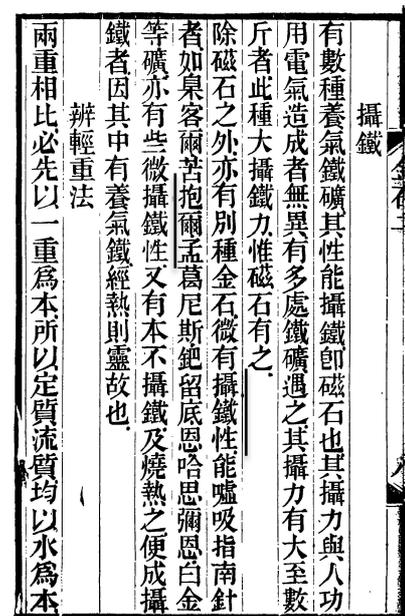


図4 瑪高温口訳・華蘅芳筆述『金石識別』

鉄鉍不能鍊者多、熱之有吸鉄性者亦多。

(鉄鉍には精鍊できないものが多く、温めて磁性が生まれるものも多い。)

(瑪高温口訳、華蘅芳筆述『金石識別』、1872 (同治 11) 年)

また、イギリス人宣教師ジョン・フライヤー (John Fryer, 1839~1928、中国名傅蘭雅)²⁹と中国人学者徐寿 (1818~1884) による中国初の無機化学書『化学鑑原』(1871 (同治 10)) では、「中立之性」(中性)「金類之性」(金属性)「鹼性」(アルカリ性) など従来の用法で「性」が使用されていたが、1875 (光緒元) 年の『化学鑑原続編』では「中立性」(中性)「大鹼性」(強アルカリ性)、1879 (光緒 5) 年の『化学鑑原補編』では「正電性」(陽性)「強鹼性之質」(強アルカリ性)「大鹼類性」(強アルカリ性) などが現れ、「性」と結びつく前部要素の字数が 2 字以上超えた。また、「中立性之爆薬」(中性の爆薬)「大鹼性之流質」(強アルカリ性の液体) のように、複合語全体が修飾語として機能しており、「性」の独立性が弱くなった。

5.2 二十世紀以降の接尾辞「性」の展開

本節では、19 世紀末以降に中国で出版された書籍・新聞を利用し、接尾辞「性」の展開について考察する。

5.2.1 漢訳和書

日清戦争後の 1896 (光緒 22) 年、中国政府は西洋文化を学ぶために日本に留学生を派遣し始めた。その後、公費だけではなく、私費留学生も年々増えていった。一方、日本人も中国に渡り、教育現場で活躍するようになった。

「性」の接尾辞化に関して、従来の研究から日本語資料の中国語への翻訳によって加速したことは自明であるが、その翻訳活動はさらに日本人による翻訳と、中国人による翻訳に分けることができると思われる。

1898 (光緒 24) 年に上海に設立された東文学社は、日本語を中国語に翻訳できる人材を育成するための学校である。設立者の中に、のちに東京帝国大学教授になった藤田豊八 (1869~1929) がいた。彼は中国人王季烈 (1873~1952) と協力し日本語の『物理学』(飯盛挺造編纂、1882 (明治 15)) を中国語に訳した。訳本は同じ書名で 1900 (光緒 26) 年に出版された。この本は中国初の体系的な物理学書である。同書の第 2 章「物体通有性」では「体積性」「障阻性」「恒性」「不滅性」「分性」「隙積性」「変積性」、そして表題にある「通有性」を含めて 8 つもの「~性」が見られた。原本の語と訳本で用語がやや異なるため、整理し次の表にまとめる。

²⁹ 傅蘭雅は 19 世紀後半期に中国に渡来した最も著名な西洋人の 1 人である。彼は中国で 35 年間生活し、西洋の数学・化学・医学・農学・軍事など多くの分野にわたる著作 110 余種を中国語に翻訳した。

表 6 『物理学』における原本と訳本の異同

日本語の原本	中国語の訳本	相違
通有性	通有性	
填充性	体積性	あり
拒性、碍性	障阻性、碍性	あり
無尽性	不滅性	あり
惰性	恒性、習慣性	あり
分性	分性	
気孔、鬆性	隙積性	あり
変容性	変積性	あり

表 6 で示したように、日本語の漢語が全てそのまま中国語に借用されたのではなく、調整を施した上で取り入れられたものが相当数ある。「体積性」「障阻性」「不滅性」などの 7 語はその前部要素がいずれも原本のそれと異なっている。しかしながら、日本語から来た漢語の一部に対しては使用に抵抗が見られたものの、接尾辞「性」の用法に対しては滞りなく受け入れられたことは明らかである。

中国人による日本書の翻訳として、1904（光緒 30）年に出版された『高等小學生理衛生学教科書』がある。この本は斎田功太郎の『生理衛生学』（1897（明治 30））を原本にしたものである。

此動物質ト礫物質ノ両成分ハ、常ニ能ク相抱合シ以テ骨ヲ構成ス。即チ骨ノ三分ノ一ハ動物質ニシテ、三分ノ二ハ礫物質トス。而シテ動物質ハ骨ニ弾力性ヲ附与シ、礫物質ハ骨ニ硬固性ヲ附与ス。

（有機物は骨に弾力性を与え、無機物は骨に硬さを与える。）

（斎田功太郎『生理衛生学』、1897（明治 30）年）

動物質与礫物質之両成分、常能相合以構成骨。其三分之一為動物質、三分之二為礫物質。動物質与骨以弾力性、礫物質与骨以硬固性。

（現代日本語訳は同上。）

（丁福保^{ていふくほう}『高等小學生理衛生学教科書』、1904（光緒 30）年）

両書を照らし合わせれば、訳本に現れた「～性」は日本語をそのまま書き写されたものとすぐわかる。

『高等小學生理衛生学教科書』の著者丁福保（1874～1952）は上海の東文学堂で日本語を学び、その後数多くの日本医学書を翻訳した。丁福保と同様に各地の学堂で日本語を学び、日本書の翻訳に取り組んだ人物は 20 世紀前半の中国に多くいた。一方、日本側でも 1900（光緒 26）年に中国人留学生による翻訳団体が出現し、日本書の中国語への翻訳がこの年から盛んに行われるようになった。これらの翻訳書の中には、教科書として当時中国各地に開設された新式学堂に採用されたものもある。³⁰

³⁰ さねとう（1960）を参照。

「性」の接尾辞的用法は日本人・中国人の日本語の翻訳活動によって中国語に流入し、一般学生の目にも止まるようになったと考えられる。

5.2.2 『申報』における使用

接尾辞「性」の受容は、近代中国の代表的な新聞紙の1つ『申報』³¹（1872～1949）を通じて見ることができる。

早期の記事における「性」は「性極高傲」（性格が極めて高慢である）や「薬性」「天性」など主に従来の意味用法で使われていた。新しい意味の例として、1895（光緒21）年3月31日の日本の疫病に関する新聞記事に「急性虎列刺」（急性コレラ）がある。これは『申報』における「急性」の初出例である。記事内容から見れば、「急性」はおそらく日本語からそのまま転用されたものと思われる。

20世紀に入り、「漢字2字+性」の用例が徐々に増えるようになった。比較的早期の例として、「遺伝性」「習慣性」「流行性」などがある。次はいずれも『申報』での初出例である。

吾聞西人頗講遺伝性，抑其遺伝之有未善乎。西人聞之，其不失声而笑者幾希。
（西洋人は遺伝性というのをよく論じると聞いているが、その親譲りの稟性に不善もあるのだろうか。）

（「寓言小説双靈魂（十三）」『申報』1907（光緒33）年3月24日）

二拋人類之性質區別之，可分為習慣性、職業性、偶発性三類。

（第二、人の性質によって、習慣性、職業性、偶発性の3類に分けることができる。）

（「沈家本調査日本監獄情形清單」『申報』1907（光緒33）年4月19日）

鄙人窃以霍乱為急行流行性之伝染病。

（コレラは感染速度が速い流行性の伝染病だと思っている。）

（「霍乱説」『申報』1907（光緒33）年9月10日）

「遺伝性」を除き、ほかの4語は日本語からの借用である可能性が大きいと思われる。

「習慣性」「職業性」「偶発性」の3語について、同年6月6日の報告書「大理院正卿沈家本奏陳調査日本裁判監獄情形摺」に「該員等將所見所聞輯訳成書」（見学者らは見聞した物事を中国語に訳し本にまとめた）とあり、「流行性」については「霍乱説」という標題の下に「日本博愛医院長棉貫与三郎述門人陳繼武訳」（日本博愛医院長棉貫与三郎が述べ、学生陳繼武が訳す）とあり、両方とも日本語との関係が明記されている。「遺伝性」については、1886（明治19）年の『東洋学芸雑誌』ではすでに使われていたため、『申報』に現れた「遺伝性」は日本語からの借用である可能性もある。

『申報』全体から見れば、接尾辞「性」の使用は主に20世紀以降に現れ、「習慣性」「職業性」のような日本語からの借用語と思われる用例のほか、「漢字2字+性質」のパターンが数多く見られた。例を挙げれば、1900年代では「国民性質」「社会性質」「保守性質」

³¹ 『申報』は近代中国において発行期間の最も長く、そして社会影響の最も高かった新聞の一つであり、中国現代新聞紙の発端でもある。1872年（同治11）にイギリス商人 Ernest Major（1841～1908）に創刊され、1949年に廃刊になるまで、計77年間持続した。筆者は北京愛如生デジタル技術研究中心のデータベース「申報數據庫」を利用した。

が使われていたが、1910（宣統2）年に「国民性」、1918（民国7）年に「保守性」、1919（民国8）年に「社会性」が使用されており、時間とともに従来の「漢字2字+性質」が「漢字2字+性」に取って代わられたことがわかる。1930（民国19）年の新聞記事を見ると、「刺激性」「保護性」「階級性」「複雑性」など、接尾辞「性」の使用はかなり一般化したがる。

5.3 まとめ

以上、中国語における接尾辞「性」の歴史について考察を行った。

16世紀から19世紀末に出版された漢訳洋書や辞書では「性」の伝統的な用法が主流を占めているが、先に述べたような新しい変化も現れた。特に19世紀には「性」による造語が多く見られ、「性」の接尾辞化において極めて重要な時期と言える。

ここで1つ留意すべき点がある。「性」の接尾辞的用法について、時間から見れば、19世紀末の時点で中国語側よりも日本語側の方が大いに進んでいる。したがって、漢訳洋書もしくは英華字典における「性」の接尾辞的用法は、日本語の影響を受けてできたという可能性が出てくる。しかし残念なことに、16世紀から19世紀半ばにかけて、宣教師たちが苦心して西洋の文化を中国に持ち込んだものの、自らの文化・思想が最も優れたものだと自負していた多くの中国人は西洋の文化を取り入れようとはしなかった。³²このような考え方を持っていた中国は当然日本の近代化を意識することもなく、日本から文化や学問を学ぼうとする発想もなかったのである。実際に中国側の洋学資料における「性」の用例と日本側の蘭学資料のそれを比較してみたところ、同形となっているのは「酸性」ぐらいで、ほかの用例はほとんど異なっている。こうした理由に基づいて、19世紀の洋学資料に現れた「性」の接尾辞的用法は中国語の内発的変化と言わざるを得ない。

20世紀初頭に入り、中国語における接尾辞「性」の使用は自然科学の書籍で多く見られるようになった。新聞紙においては「可能性」「習慣性」など「性」の原義から遠く離れた用例も確認された。これらの用例は19世紀の洋学資料のそれと大いに異なっており、おそらく日本語の流入によってもたらされた新語であろう。中国語における「性」の接尾辞化は日本語の刺激を受けて加速されたと考えられる。

6. 日中両語間の相互影響

以上、日中両語それぞれにおける接尾辞「性」の歴史について考察を行ってきた。各章において日中両語間の相互影響についても議論したが、ここで改めて整理する。

まず「性」という字は、古代中国語に起源があり、漢籍では主に1語で、または2字漢語の一部として使用されていた。日本は古くから中国と交流があり、漢籍を輸入することによって「性」の意味用法が学ばれたと思われる。そのため、日本語における「性」の使用は漢籍のそれと共通するところが多いと言える。しかし文学作品で見られた「甲斐性」などの用例からもわかるように、日本語における「性」は独自の発展も遂げていた。

本論文で議論した近現代接尾辞「性」の発生は、日本語側でも中国語側でも西洋との交流が始まったことが重要な契機であったと考えられる。

まず接尾辞「性」の用法が早く成立した日本語側の状況を見れば、18世紀の蘭学資料に「大熱性」「温燥性」などの「漢字2字+性」の造語が複数現れた。奈良時代に日本に伝わった中国の伝統医学である本草学の、薬性に関する「寒・熱・温・涼・平」などの概

³² さねとう（1960）を参照。

念が蘭学者に影響を与えたと思われる。本草学にある「性大熱」「性温燥」などの句レベルの表現は蘭学者によって語に発展させられた。しかし、「性」による造語は薬物関係の蘭方書にしか見えず、前部要素の文字も「熱」「燥」などに限られる。

19世紀初頭の蘭学資料に「腐敗セシムル性」「石鹼ニ似タルノ性」など、「性」を使用する句が多く見られた。その後1910年代に「石鹼性」「石灰性」という漢籍に出典のある2字漢語と「性」が結合した形が現れた。さらに1920年代以降「防腐性」「可溶性」など、蘭学者が中国語の語順で作った2字漢語と「性」の結合も出現した。19世紀前半の蘭学資料において「性」の接尾辞的用法は速いスピードで広まったと言える。では、19世紀初頭から1910年代の間に起こった「性」における句から語への転換は、単純に日本語の内発的变化と言えるのか、それとも同じ時期に中国から舶載されてきて大いに読まれた科学書『物理小識』（方以智、1664（康熙3））に現れた「漢字2字+性」の用法と何らかの関係があるのであろうか。『物理小識』に現れたわずか2例が、日本語における接尾辞「性」の発生に直結したことは言い難いが、1つ新たな用法として蘭学者に受け止められた可能性はあると考える。

明治時代に入り、啓蒙家たちは蘭学者が作った用語もそのまま使用しながら、「性」を用いて新たな造語に取り込んだ。1870年代の西周の作品に現れた新たな造語は、「性」の接尾辞的用法は自然科学だけではなく、人文科学の造語パターンとしても使われるようになった、という変化の証拠と言えるであろう。そして、20世紀初頭の新聞では、接尾辞「性」による語が数多く確認され、「性」の接尾辞的用法はかなり普及していたことが窺われる。

次に中国側の状況を見てみる。16世紀の中国では、西洋からやってきたカトリック宣教師たちが布教を推し進めるために西洋の書籍を翻訳・出版した。これと同時に、中国人の学者も西洋の文化を吸収しながら、自ら科学書を書き出した。この時期の洋学書について調査したところ、「性」は主に伝統的な用法で使用されていた。先にも述べたように、『物理小識』に「漢字2字+性」の用法が現れたが、現代語の接尾辞「性」とまだ大きな隔たりがあると思われる。

18世紀の中国ではプロテスタント宣教師が到来した。1860年代から日清戦争後の1986年まで中国に出版された英華字典また漢訳洋書では、「性」による新たな造語が出現し、意味・用法とともに古典と異なっていた。この時期は「性」の接尾辞的用法の発生期とも言える。

そして1986年に13名の中国人学生が日本に留学し、それ以降中国と日本との間で人的な移動が活発になった。日本人の中国滞在、中国人の日本留学はそれぞれ日本語の近代語彙が中国語に流入した契機となった。中国の新式学堂で使われていた教科書は、その一部が日本書を元に作られたものであり、新聞紙の記事にも日本または日本語と関わる用語が見られる。これらの書籍・新聞に出現した接尾辞「性」の用例の中に、「通有性」「流行性」「習慣性」など日本語をそのまま借用したと思われる例が少なくない。中国語における「性」の接尾辞化は日本語の流入によって加速されたと考えられる。

7.おわりに

本論文は用例の観察に基づいて、日中両語における接尾辞「性」の歴史全体について一貫した記述を行おうと試みた。また、接尾辞「性」を巡るの両語間の関係についても、日中語彙交流の観点から再考した。

日本語における接尾辞「性」の発生は西洋文化の流入が直接的な刺激ではあるが、その裏には古い中国語—漢字・漢文—の支えがあったと言っても過言ではない。一方、中国語における接尾辞「性」はその発生が日本語の流入の前にすでに見られたが、その成立には日本漢語からの深い影響があった。

接尾辞「性」という造語法による語彙が数えきれないほど存在するため、筆者の調査の行き届かない用例もあることが考えられる。また、接尾辞「性」について調査した際に、「学」「法」などほかの漢字の接尾辞化も観察された。

接尾辞「性」の歴史についてのより詳細な調査と、ほかの接尾辞の歴史についての考察は今後の課題としたい。

参考文献

- 荒川清秀(1986)「特集・接辞 -性-式-風」『日本語学』第5巻第3号(明治書院)
- ヴォルフガング・エッカルト著、今井道夫・石渡隆司監訳(2014)『医学の歴史』(東信堂)
- 遠藤智夫(1995)「『英和对訳袖珍辞書』・『百学連環』・『哲学字彙』に於ける訳語一致度の考察」『英学史研究』第28号
- 王敏(2009)『中国人の日本観：相互理解のための思索と実践』(三和書籍)
- 梶田昭(2003)『医学の歴史』(講談社学術文庫)
- 加納千恵子(1991)「漢字の接辞的用法に関する一考察(3) -『性』の品詞転換機能について-」『文芸言語研究 言語篇』第19巻(筑波大学・言語学系)
- 高名凱・劉正琰(1988)『現代中国語における外来語研究』(関西大学東西学術研究所資料集刊16)
- 斎藤倫明・石井正彦編(2015)『日本語語彙へのアプローチ—形態・統語・計量・歴史・対照—』(おうふう)
- さねとう・けいしゅう(1960)『中国人日本留学史』(くろしお出版)
- 朱京偉(2003)『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門用語を中心に』(白帝社)
- 朱京偉(2011)「蘭学資料の三字漢語についての考察：明治期の三字漢語とのつながりを求めて」『国語研プロジェクトレビュー』第4巻(国立国語研究所学術情報リポジトリ)
- 沈国威(1994)『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』(笠間書院)
- 杉本つとむ(1976)『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I—長崎通詞による蘭語の学習とその研究—』(早稲田大学出版部)
- 杉本つとむ(1977)『江戸時代蘭語学の成立とその展開 II—蘭学者による蘭語の学習とその研究—』(早稲田大学出版部)
- 杉本つとむ(1981)『江戸時代蘭語学の成立とその展開 IV—蘭語研究における人的要素に関する研究—』(早稲田大学出版部)
- 田野村忠温(2017)「近現代語『可能』の成立：日中両語間の双方向的影響」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第57巻
- 陳力衛(2014)「明治の科学啓蒙家の苦心—『-力』、『-性』の接辞化へ向けて—」『日本語学』第33巻3号(明治書院)
- 野村雅昭(1978)「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究』第9巻(国立国語研究所学術情報リポジトリ)
- 野村雅昭(1981)「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』第49巻(岩波書店)
- 北京師範学院中文系漢語教研組(1959)『五四以来漢語書面語言的変遷和發展』(商務印書館)
- 水野義道(1985)「接尾的要素『-性』『-化』の日中対照研究」『待兼山論叢』第19号(大阪大学大学院文学研究科)
- 水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」『日本語学』第6巻第2号(明治書院)
- 森岡健二編(1991)『改訂 近代語の成立 語彙編』(明治書院)
- 楊超時(2010)「近代漢語接尾辞の形成についての一考察—『-性』『-的』『-化』『-上』を例に—」『語学教育研究論叢』第27号(大東文化大学語学教育研究所)
- 楊超時(2012)「清末報刊中三字詞“□□+性”的用法」『日本学研究論叢』第七輯(外語)

教学与研究出版社)

楊超時 (2014) 「明治時期日語『性』的用法」『日本学研究論叢』第九輯 (社会科学文献出版社)

楊超時 (2015) 「近代日語中後綴『性』的形成和用法分析」『新世紀術語及新詞日訳の探索と発展』(南開大学出版社)

楊超時 (2017) 『近代中日詞彙交流与“的”“性”“化”構詞功能的演变』(中国社会科学出版社)

吉村弓子 (1987) 「漢字の読み分けにあらわれる統語機能」『日本語学』第6卷8号 (明治書院)

謝辞

本論文を完成するまでには、多くの方々からご指導、ご支援をいただきました。ここに記して感謝致します。

まず、本論文を執筆するにあたり、常に有益なご指導と温かいご鞭撻をくださった指導教官の田野村忠温先生に、心より感謝を申し上げます。演習でのご指摘、そして日常の会話などを通じて、田野村先生から長期にわたって知的な刺激をいただきました。

また、共同演習、中間発表会で発表した際に貴重なご意見をくださった副指導教官の石井正彦教授、三宅知宏教授には、謹んで御礼申し上げます。

日本語学講座の先輩や後輩の皆様からも、本論文をまとめる上で多くの有用なご助言と励ましの言葉をいただきました。これらの方々のご協力なくしては、私が本論文を完成させることは到底できませんでした。ここに、心より御礼申し上げます。

沙 広聡

年表

(A) 日本資料における用例

	資料名	出現形・文脈	分野
1683(天和3)?	桂川邦教 繕生室 医話	温性、大熱性 [、性微温、性寒燥]	医学-薬学
1696(元禄9)	上村平左衛門 阿 蘭陀外科指南	寒性、燥性 悪性【A型 <small>(新)</small> の初出】[、温散ノ性]	医学-薬学
1728(享保13)	山田通碩 阿蘭陀 外科書	温性、熱性、寒性、平性、冷性、温燥性、 燥熱性、湿温性、大熱性 [、性微寒、性 ハ温也]	医学-薬学
1746(延享3)	河口良庵 阿蘭陀 外療集	熱性、温性、大熱性、微温性、温燥性、 湿温性	医学-薬学
1793~1810 (寛政5~文化 7)	宇田川玄随 西説 内科撰要	[稀涼ナル性、苛毒ノ性、慄悍酷熱ノ性、 腐敗セシムル性、自ラ変壞スルノ性、物 ヲ衛護扶持スルノ性、自己ノカニテ循行 スルノ性、石鹼ニ似タルノ性、石鹼ノ如 クナル性、石鹼ノ如キ性]	医学-内科
1805(文化2)	宇田川玄真 医範 提綱	酸性、悪性、熱性 [、酷厲ノ性、煦温滋 潤ノ性、粘著鈍滯ノ性、醸熟スルノ性]	医学-内科
1814(文化11)	吉田成徳 訳 泰西 熱病論	熱性、悪性、石灰性、石鹼性【N型 <small>(新)</small> の 初出】[、侵食ノ性、酷厲腐敗ノ性、]	医学-内科
1820(文政3)	宇田川玄真 訳 宇 田川榕菴校集 和 蘭薬鏡	酸性、悪性、寒性ノ結腫、鉄性ノ土、腐 敗性ノ潰爛癌【非薬物関係の文脈におけ る3字V型の初出】、療瘵性ノ酷厲毒 [、 解毒ノ性功、滑利潤下ノ性]	医学-薬学
1821(文政4)	杉田立卿 訳述 青 地林宗校正 黴瘡 新書	悪性、良性、熱性之人、寒性之人	医学-内科
1822(文政5)	宇田川玄随 訳 宇 田川玄真校註 藤 井方亭増訳 増補 重訂内科撰要	病性、常性、熱性、悪性、善性、自性、垂 兒加利性、甘和性ノ油、清涼性 [、自己 ノ性、半生未熟ノ性、悪厲ノ性、酷厲ノ 性、温煖ノ性、自ラ相聚テ凝結スル性]	医学-内科
1822(文政5)	宇田川玄真 遠西 医方名物考	瘵性、鉍性、寒性、熱性、善性、良性、 固性消石、鉄性ノ油、酸性土、悪性の潰 瘍、礬性及ビ海塩性ノ酸気、硝子性土、 鋭烈性、清涼性、瘵撃性、腐敗性、焮衝 性、胆液性、寒粘液性、中和塩性、拔爾撒 謨性、垂兒加利性、垂兒加利塩性 [、焮 衝ノ性、刺撃ノ性、腐敗ヲ防ク性功]	医学-薬学
1825(文政8)	宇田川榕菴 舍密 開宗初稿	固性、中性塩、アルカリ性 [、金属ノ性]	化学
1827(文政10)	青地林宗 気海観 瀾	碍性、引性、発燄性、防腐性	物理

1833(天保 4)	宇田川榕菴 植学 啓原	機性体、無機性体	植物
1837~1847 (天保 8~弘化 4)	宇田川榕菴 舍密 開宗	酸性、中性、磁性、鉍性加黙良、機性、 植性半酸、苛性、緩性、強性、悪性、剛 性、乾性、和性、熱性、蝕性、爆性、和 水性、褪色性、延張性、亜爾箇兒ニ可溶 性ノ塩類、玻璃性越力、華爾斯性越力、 亜爾加里性、拔塞斯性 [、褪色ノ性、放 光ノ性、和水ノ性、潮解スル性、雷鳴ス ル性、延張スル性、亜爾箇兒ニ溶ザル性]	化学
1857(安政 4)	緒方洪庵等 扶氏 経験遺訓	湿性、燥性、急性、良性、虚性、緩性、 頑性、慢性、純性、瘧性、焮衝性、神経 性、腐敗性、痙攣性、感応性、固有性、 腸胃性、痙攣性、多血性、癱瘓質性、越必 埶密性、英埶密性、歇以私的里性	医学-内科
1858(安政 5)	新宮涼民・大村 恭・新宮涼閣 コ レラ病論	悪性、真性、固性、胆汁性、癱瘓性、遊 走性、神経性、流行性、分離性、揮発性、 麻醉性	医学-内科
1867(慶応 3)	竹原平次郎 化学 入門初編	酸性、陽性金属、陰性金属 [、不可溶ノ 性]	化学
1869(明治 2)	桂川甫策・石橋八 郎 化学入門	酸性、中性、頑性、真性、苛性、劇性、 熔性、流動性、堪火性、塩基性、抑圧性、 焚燒性、化学性、理学性、有機性、易燃 性、可溶性安質剤、不揮発性物、亜爾加 里性 [、自燃スルノ性、堪火ノ性、非金 属ノ性]	化学
1870(明治 3)	石黒忠憲 化学訓 蒙	中性、酸性、塩基性、中和性、強酸性、 弱酸性、植物性、無機性、戟刺性、積極 性、消極性	化学
1870(明治 3) 頃	西周 靈魂論 靈 魂一元論	ベレソツフベリチ センシビリチー オクシウン 覺性、感性、作性 [、縮脹之性]	哲学
1872(明治 5)	片山淳吉 物理階 梯	填充性、定形性、礙竄性、無尽性、習慣 性、分解性、気孔性、圧搾性、膨張性、 運動性、引力性	物理
1873(明治 6)	西周 生性発蘊	理性、硝性、動性、植性、機性体、機性 原質、無機性、有機性、無機性体、有 機性体、半機性、高機性、自愛性、他 愛性、有情性、不可識性 [、植物ノ性、 惕縮ノ性、実体ノ性、理体ノ性]	哲学-科学 哲学
1874(明治 7)	西周 百一新論	分性、硬性、真性、固保性、機性体、無 機性体、有機性体 [、同一ノ性、為群ノ 性]	哲学-科学 哲学
	西周 致知啓蒙	属性、記性	哲学

1874~1875 (明治7~8)	明六社 明六雜誌	貪知性、合同性、分異性 [、分異ノ性、 為群ノ性、貪知的ノ性]	哲学
1877(明治10) 前後	西周 美妙学説	[道德ノ性、感受ノ性、感受スルノ性、 想像ノ受性]	哲学-美学
	西周 原法提綱	理性 [、法之性、道德之性、自愛之性、 特殊之性、同感之性、確定之性]	哲学-法哲学
1878(明治11)	西周 才能偏僻生 於作用之反覆説	能動性	哲学
1881(明治14)	井上哲次郎 哲学 字彙	覚性、感性、属性、礙性、惰性、特性、 偶有性、普有性、縮性、分性、展性、容 性、偶性、通性、理性、相对属性、不動 性、不滅性、無尽性、永続性、全成性、 可能性、盖然性、固有性、敏捷性、把住 性、感受性、触接性、通有性、不可測性、 不可想性	哲学
1881~1882 (明治14~15)	東洋学芸社 東洋 学芸雜誌	磁性、酸性、中性、属性、溶性、理性、 塩基性、不銹性、慢性病、苛性加里、不 導温熱性、植物性蛋白質、動物性蛋白質、 無機性化合物	物理他
1884(明治17) 起稿	西周 生性割記	覚性、受性、記性、理性、分性、真性、 悟性、概性、特性、障性、機器性	哲学
1888(明治21)	民友社 国民之友	悪性、自然性、習慣性	社会他
1895(明治28)	陸海軍士官素養 会 凱旋紀念帖	発火性、危険性	軍事
		慢性、理性、酸性、彈性、浸透性、結晶 性、婦人性、国民性、下血性、不発性、 個人性、亜爾加性	医学他
1901(明治34)	博文館 太陽	悪性、酸性、粘性、乾性、苛性、急性、 熱性、良性、惰性、慢性、軟性、硬性、 塩性、本能性、健忘性、中間性、動物性、 国民性、可塑性、有機性、共通性、液質 性、金属性、腐蝕性、揮発性、吸湿性、 耐火性、流行性、免疫性、普通性、可溶 性、伝染性、可展性、有孔性、不溶性、 可鍛性、溶解性、燃燒性、懶怠性、爆発 性、特殊性、小頭性、水頭性、癲癇性、 痲痺性、焮衝性、黴毒性、外傷性、腦硬 化性、アルカリ性、クレチニズムス性	社会他

(B) 中国資料における用例

	資料名	出現形・文脈	分野
1390 (洪武 23)	朱橚等 普濟方	熱性之藥、寒性之藥、熱性藥、猛性藥、存性、留性 [、畏寒之性]	医学-薬学
1612 (万歴 40)	熊三抜口訳・徐光啓筆述 泰西水法	熱性、水性、湿性 [、熱乾之性]	水利
1679 (康熙 18)	蒋介石 本草採要綱目	熱性藥品、寒性藥品、温性藥品、平性藥品	医学-薬学
1664 (康熙 3)	方以智 物理小識	灼性、湿性、死性之火、異性、弱性、 柔水性 、 剛火性 【3字N型 ^(新) の初出】[、陰潤之性、陽燥之性]	百科
1866~1869 (同治 5~8)	羅存徳 英華辞典	燒肉性 、 灼肉性 【3字V型の初出】[、属水之性、有化為同類性、薑辣之性、致瀉之性、食壞之性、婦極之性、互拒鑷之性、記念之性、草木之性、轉向之性、偏向之性、相膠之性、易洩氣之性]	辞書
1871 (同治 10)	傅蘭雅口訳・徐寿筆述 化学鑑原	吸性、動性、静性、烈性、配性、鹹性、火性、韌性、堅性、奇性、脆性 [、金類之性、非金類之性、化合之性、吸鉄電気之性、相吸之性、消化之性、中立之性、自能融和之性、摂鉄之性、变化物質之性、爆裂之性、滅臭之性、猛烈之性、有原質之性、鹹類之性、吸鉄之性、特異之性、易化分之性]	化学
1872 (同治 11)	瑪高温口訳・華蘅芳筆述 金石識別	摂鉄性、吸鉄性	鉱物
1875 (光緒元)	傅蘭雅口訳・徐寿筆述 化学鑑原統編	配性、爆性、酸性、鹼性、燃性、 中立性 【3字A型 ^(新) の初出】、大鹼性之流質 [、变化之性、猛烈之性、永静之性、本質之性、膠粘之性、葡萄糖之性、発芽之性、植物之性、転偏之性、爆裂之性、易散之性、化分之性、鹼類之性]	化学
	傅蘭雅口訳・趙元益筆述 冶金録原	韌性 [、無粘合之性、速冷之性、軟膏之性]	工学
1876 (光緒 2)	傅蘭雅編 格致彙編	韌性 [、伝熱之性]	物理
1879 (光緒 5)	傅蘭雅口訳・徐寿筆述 化学鑑原補編	酸性、脆性、鹼性、正電性、中立性、大鹼類性、強鹼性 [、易鎔之性、引長之性]	化学

1880(光緒 6)?	格致啓蒙	鹼性、酸性	化学
1889(光緒 15)	傅蘭雅 力学須知	永静性、永動性	物理
1900(光緒 26)	物理学 飯盛挺造編 纂 藤田豊八訳	通有性、体積性、障阻性、恒性、 不滅性、分性、隙積性、變積性	物理
1902(光緒 28)	杭州白話報	媚外性	社会
	新世界学報	愛国性	社会
1903(光緒 29)	北洋官報	微生物之耐寒性	生物
	農務化学簡法 傅蘭 雅口訳 王樹善筆述	消蝕性、鱗性、酸性、強性、軟性、 辣性、悪性、中立性、剝蝕性之質、 韌性、砂性之質、灰性之泥、灰性 之土、灰性之砂、収水存水之性	化学
1906~1909(光 緒 32~宣統元)	申報	慢性 1906、苛性 1906、遺伝性 1907、習 慣性 1907、職業性 1907、偶発性 1907、 流行性 1907、可能性 1909 [、国民性 質、自立之性、社会性質、保守性 質、積極性質]	社会他
1910~1919(宣 統 2~民国 8)		惰性 1910、植物性 1910、結核性 1910、 国民性 1910、自立性 1911、彈性 1912、 塩基性 1915、普遍性 1916、仮性 1918、 保守性 1918、社会性 1919 [、科学性 質、全国性質、政治性質、嚴重性 質、重要性質]	
1920~1929(民 国 9~民国 18)		耐勞性 1920、積極性 1923、科学性 1925、 全国性 1927、政治性 1926、矛盾性 1928、 重要性 1928 [、普通性質、危險性質]	
1930(民国 19) 以降		嚴重性、積極性、結核性、保守性、 流行性、可能性、嚴重性、植物性、 慢性、普遍性、全国性、彈性、苛 性	